

滋賀県平和祈念館 第28回企画展示

戦争が終わって ー海外からの復員と引揚げー

(会期：令和3年3月3日～6月20日)



マニラ郊外の米軍13捕虜収容所にて

ごあいさつ

国内外に玉音放送が流れた昭和20年(1945年)8月15日、日本は平和国家への道を歩み始めました。終戦時、海外には660万人以上の軍人や民間人がいたといわれています。8月15日を海外で迎えた多くの人々にとって、終戦は新たな苦難の始まりだったのです。

海外で終戦を迎えた多くの兵士たちにとって、終戦による停戦命令や武装解除は、終わりの見えない捕虜生活の始まりを告げるものでした。滋賀県出身の兵士たちも、凄惨を極めたシベリア抑留だけでなく、中国、フィリピン、ビルマなど、各地の収容所でも様々な形での不自由な捕虜生活を強いられました。

戦前、滋賀県からも夢を抱いて多くの人々がアジア各地やアメリカ大陸などへ渡りました。戦後、多くの人々が満足な支援を受けられないなか、日本へ引き揚げられることを強いられました。命を危険にさらして故郷を目指し、家族や親しい人たちとの死別・別離を経験された方々もいます。

今回の展示では、終戦を海外で迎えた方々の体験談やモノ資料で、海外からの復員と引揚げを紹介します。

令和3年3月3日

滋賀県平和祈念館

プロローグ

1) 玉音放送の流れの中で

昭和20年(1945年)7月26日、連合国軍は日本の降伏条件を決めた『ポツダム宣言』を通告しました。その内容は『日本の軍国主義勢力の除去や軍の武装解除、戦争犯罪人の処罰、民主主義、平和を求める政府の樹立などが達成されるまで、連合国軍が日本を占領する』としたものでした。一方で、宣言には『武装解除した兵士はそれぞれの家庭へ帰り、平和な生活を送れること』や『日本民族を奴隷化しないこと』も明記されています。

8月14日、日本は『無条件降伏』を求めるポツダム宣言を受諾します。翌日の8月15日正午、日本国民に敗戦を告げる天皇の声(玉音放送)が国内に流れました。国内の人々は放送によって戦争が終わったことを知りました。

【体験談—終戦そして、家族の帰りを待つ想い—】

田中 もとさん(大津市)の手記『君発ちし後の記』
より抜粋

昭和19年(1944年)8月20日、田中もとさんの夫田中為三郎さんは出征して行きました。田中もとさんは、その日から日記を書き続けました。日記を元にした手記『君発ちし後の記』から、終戦を知った田中もとさんの気持ちを見てみましょう。

終戦当日、田中もとさんは玉音放送よりもお盆のお参りを優先されました。

8月15日 「今日正午に、重大放送が有る」とか聞いた。実さん宅へ聞きに行こうかと云っていたが、お寺参りの支度で行けず。一中略一 休憩時間等に、重大放送の内容を少々聞いた。けれど、まとまった事は一向に分からず。何か、日本が甚だ不利な立場にあるらしい様子。一後略一

昨日に聞いた不穏な話を気にしていた田中もとさんは、朝一番に新聞を熟読し、日本の敗戦を知りました。その日は一日中、敗戦の暗い気持ちが頭から離れなかったようです。

8月16日 とうとう来た。待っていた新聞が。何も手につかず。一気に裏表すっかり読んでしまった。これで、どうやら日本の負けが確かに知れた。一中略一 重苦しい気持ちが頭を襲う。本当とは思

われない現実、又ぼんやりと一時を過ごす。

一後略一

次の日には敗戦の暗い気持ちを断ち切って、日々の仕事に励もうとされたようです。

8月17日 連日の暑さ続く。負けた話ばかりしていても仕方がない。どうなっても、ただ動かなければならない。一後略一

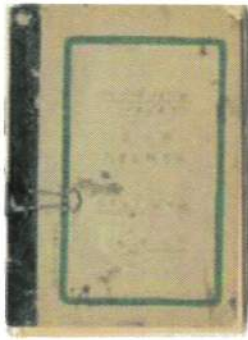
8月22日頃になると冷静さを取り戻し、抑えてきた夫為三郎さんの無事な帰還を願う気持ちが全面に現れます。出征から1年後8月25日の想いです。

8月25日 ああ、8月25日。再び此の記帳に、(為三郎さんが出征された)同じ月日を記す日が訪れた。一ヶ年前、不安な心で危険な航海の無事を祈った頃だった。また今、無事の帰還を心から祈り続ける日頃である。いづこの孤島においての事か。きっと内地の様子も実際以上に想像して、私達の安否を気づかかって下さるであろう。君の心を偲びて、切なき思ひ増す。こちらはどうか心配なく。こんなに元氣ですから。あなたの御体を十分にと、云ってやり度い心でいっぱい… 一中略一 強き風、雨模様。ああ、君立ちし後一ヶ年の月日も、今すぎて行く。**この日以降も田中もとさんは夫の無事な復員を待ち続けました。**

(引用文献: 田中もと『君発ちし後の記』2005年、山猫軒書房発行)



田中さん夫妻の写真 田中為三郎さんが戦地へ赴く直前(昭和19年(1944年)8月撮影)



日記帳『君 発ちし後の記』



戦後出版された手記

田中もとさんが夫の為三郎さんの出征の日からの日々の出来事や詩を書き留めた当時の日記帳と、当時の日記帳をもとに 2005 年に田中もとさんが戦時中の話を綴られた手記です。



『読売新聞』(昭和 20 年 (1945 年) 8 月 15 日号・16 日号)

終戦の翌日、田中もとさんが日本の敗戦を知った新聞です。

2) 日本軍の捕虜収容所

日本軍がアジア・太平洋戦争で捕虜とした連合国軍兵士の総数は約 30 万人(終戦時点の捕虜総数は約 10 万 3 千人、民間人抑留者約 12 万人を除く)とされます。彼らは劣悪な環境のもと、強制労働を強いられました。栄養失調や病気、日本軍兵士等による殺害などによって、多くの捕虜が亡くなりました。その数は確認されているだけで約 22,600 人と、全収容者の約 7.5%にも及びます。これはシベリア抑留者約 57 万 5 千人の死亡割合 9.6% (死者数 5 万 5 千人)と比べても、決して低い割合といえないものです。

滋賀県では昭和 20 年 (1945 年) 5 月、米原・能登川・野田沼の 3ヶ所の捕虜収容所が造られ、捕虜となった連合国軍兵士 641 人が琵琶湖の内湖干拓工事に従事させられました。

【体験談—野田沼捕虜収容所での終戦—】

田中 憲一さん (野洲市)

【終戦場所】野田沼捕虜収容所 (滋賀県野洲市野田)

戦争中、野洲市野田にあった野田沼捕虜収容所(大阪俘虜収容所第 8 分所)には、約 200 人ものオランダ人 (連合国軍捕虜) が収容され、琵琶湖の内湖であった野田沼の干拓工事に従事させられていました。監視員をされていた田中憲一さんと捕虜たちの終戦です。

最初の 2ヶ月くらいは、俘虜 (捕虜のこと) と親しく口きいたりしたら、「密通している」と思われるとかなわんし、彼らも警戒してたから、あまり話さんかった。でもある日、俘虜の一人に「タナカ、貴方は我々のことをどう思っている？」と尋ねられたんです。それで、片言の英語でしたけど、「僕は君たちを友達だと思っているよ。僕も弟妹がブラジルにいるんだ。『もし、兄弟が捕虜になって苦しめられたら』と思うと、僕も貴方たちを苦しめたくないんだ。お互いに人間として付き合いたい」と、気持ちを伝えたんです。それから、お互いにだんだん話すようになりましたね。

終戦の詔勅が出ると、収容所長や俘虜を殴ってた兵隊はその日のうちに皆逃げてしまよかったんです。

区長さんも（元捕虜による婦女暴行などを恐れて）「女の人は親元などのところに身を隠してくれ」と触れ（回覧板）を回して来ました。私は捕虜たちに信用されていたし、「万一、なんかあったら困る」と思いましたから、一人で収容所へ乗り込んだんです。そしたらみんな、水で頭の髪を綺麗に分けて、もう立派な兵隊になってましたわ。4人ほどが私の周りを取り囲んで、白人のリーダーが「ミスター！何故、戦争が急に終わったのか」と尋ねたんです。新聞で見た広島や長崎のことを思い出して「ヘビー・ボーン。ヒロシマ」と言ったんです。すると、彼らは顔を見合わせて、すぐに「分かった。アトム・ボーン（原子爆弾）だ」て。いずれ原子爆弾ができるのを知ってたんです。日本との科学知識の差を思い知らされました。これでは、戦争に勝てる訳がないと思いましたね。

それから、彼らは収容所の屋根に「P.O.W（戦争捕虜）」と書いた白い布切れを広げたんです。すると、米軍機2〜3機が飛んできて、ドラム缶を付けた6畳くらいの大きさの落下傘をいくつも落として行きました。中にはチョコレートやタバコ、肉、ジャムなんかのいろんな食糧や衣類が入ってました。

しばらくして、日本にアメリカのMP（米軍憲兵）が来たんです。元俘虜のリーダーは「きみはMPが恐いか」と聞いてきたんです。「恐くない」と言いましたけど、彼は「証明書を書いてやる。もし、MPに苛められたらこれを見せなさい」といって、なんかの紙片の裏に「この人は非常に親切で立派だった」という意味のことを英文で書いてくれたんです。そして、彼らが引揚げる前の晩には、「僕らはもういないから」と言って、たくさんの砂糖や肉を家まで持って来てくれたんです。



米軍が能登川捕虜収容所へパラシュートで投下した救援物資

- 左：投下された箱
- 右：入っていた毛布



フィリピンで降伏した連合国軍兵士？



野田沼捕虜収容所の井戸

現在、捕虜収容所跡は村の共同墓地となっています。この地に捕虜収容所があったことを、野田の歴史として伝えていくため、墓地の一面には、捕虜たちが当時、使用した井戸が地域の人々の手で大切に保存されています。



野田沼干拓地の堤防に建つポンプ小屋
ポンプの設置工事を捕虜が行いました。

3) 戦争が終わるまで



満洲（中国東北部）の柿売りのおじいさん



舟で漁をする中国の人たち（黄河にて）



農作業をする満洲（中国東北部）の住民
（絵はがき 牡丹江周辺の農村風景）



攻撃を受けた街（中国東北部の戦場）



戦場での記念写真

（洪毛墨母塞での戦野後に京都日日新聞記者撮影）



戦闘によって燃え落ちる鉄橋（中国東北部の戦場）



炎上する集落を進む日本軍



ソ連・『満洲国』国境付近の日本軍兵士たち (中国東北部)



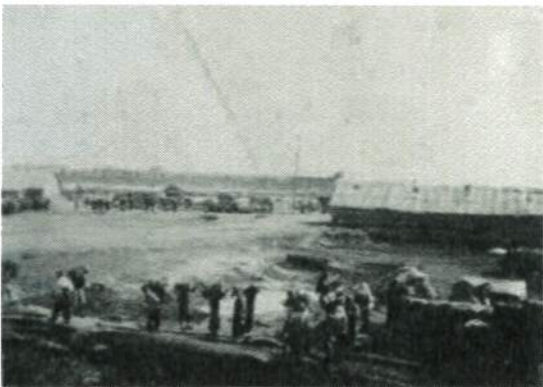
日本軍とフィリピンの人々



中国の戦場を移動する日本軍の兵士たち (漢口作戦終了後)



フィリピン 日本軍兵士と砲弾



物資輸送に駆り出された中国の住民たち



戦闘によって破壊されたフィリピンの街



日本軍の物資輸送のための道路を補修する中国の人たち



フィリピン 集落を通る日本軍



フィリピン 機関砲を点検する日本軍兵士



フィリピン 子どもを抱っこするお母さん



牛車に乗るフィリピンの人々



ビルマ 白兵戦で戦う日本軍の兵士たち



日本軍の空爆を受けるビルマの首都ラングーン
(昭和16年12月24日撮影)



僧侶にお布施をするビルマの人たち

第1章 終戦 捕虜収容所へ

第1節 終戦後の戦場では

アジアと太平洋の各地の戦場では、兵士たちは様々な形で終戦を知ることとなります。朝鮮半島や東シナ海沿岸など日本からのラジオ放送を聞くことができる地域では、国内と同様に玉音放送で終戦を知りましたが、多くの地域では、軍司令部から連絡や停戦命令で、はじめてその事実を知りました。その連絡は、脇坂利一さんや山中隆一さんのように、8月16日に伝えられたケースが多かったとみられますが、ビルマの最前線にいた小林育三郎さんの部隊のように、8月20日になってようやく伝達された例もあります。さらに、司令部が壊滅した沖縄や、部隊がジャングルへ敗走したため司令部と連絡が困難であったフィリピンでは、米軍が行った飛行機でのビラの散布や投降勧告によって、兵士たちは戦争が終わっていることを知りました。多くの兵士たちは終戦を知るまでの間、飢えや病気に苛まれながら戦場で戦うことを強いられました。

停戦命令を受けた兵士は、連合軍による武装解除を受け、各地の捕虜収容所へと送られました。その一方で、「捕虜に対する虐待の恐れ」や「捕虜となることを許さない日本軍の教育」を信じ、逃亡や自殺に及んだ兵士もいます。

【体験談—特攻の予定日は8月17日でした—】

脇坂 利一さん（東近江市）

【終戦場所】中国舟山島付近（中国浙江省舟山市付近）

昭和20年（1945年）8月1日、中国の上海近郊にあった舟山島警備隊に所属する脇坂利一さんはボートのような小船での特攻（体当たり自爆攻撃）を命じられました。

「脇坂、本部から進級の辞令が出たあるで、本部に来てくれ」って言われたんや。「おかしな〜、5月に進級したとこやのにな」と思った。あとから考えてみるとよ、うまいこと考えとる。進級したもんは、男の兄弟のあるもんだけや。殺したら家絶えてしまうような一人息子はだれもおらんかった。

ショウバンショウウチゅう名前の秘密基地に極秘で連れていかれて、マルヨン艇（震洋）というベニヤ

板で囲った（造られた）船の操船訓練ばかりした。先に爆薬が付いてて、圧縮空気で前に進む小さい船やった。敵前500mほどで親元の船から降ろして、敵艦に当たるんや。

特攻隊は8月13日と15日、17日に分かれて、3組が沖縄へ突入することになったんや。くじ引いたら、（負けた）わしら（5人）が一番最後になって。

13日と15日の2組は出よった。かわいそうに、15日の午前3時に出よったやつ、助けようもない。ほんで、17日の仲間だけが助かったんや。

8月16日に停戦になったと聞いたんや。「停戦になったんなら、負けてやせんでよいわ。皆、祝いしよう」といつてたけど、明るる日に無条件降伏やと分かった。そんな時は「どうあっても、17日に（特攻艇で）突入するんや。」と思つてた。その後も「後になればなるほど（敵も）油断しよるで…」と、8月20日まではそう思つてた。けど、20日過ぎてからは、「もう生きよう。あほらしいでやめとこと、思つたんや。」

【体験談—ジャングルの中で知った終戦—】

野村 和男さん（東近江市）

【終戦場所】フィリピン レイテ島のジャングル
昭和19年（1944年）9月、飛行機の整備員（軍属）としてレイテ島で飛行場を建設していた野村和男さん（当時15歳）は、米軍からの空襲や艦砲射撃を受け、兵士たちと共にジャングルへ逃げ込みました。

恥ずかしい話やけどよ。（部隊は）山（ジャングル）に逃げ込んだんや。敵が優勢でしたさかい。毎日、毎日、だんだん奥へと行軍してたんや。それで終戦まで1年半ジャングルに入つてました。けど、今度は食べものがあらへん。現地の住民が植えとかけるトウモロコシやサツマイモを、まあちょっと、取りに行つたりしました。みんな（他の兵士たち）が取つて行くさかい、いかほど（幾らも）太いもんなかった。そんなんを生かじりしてましたんや。

それから「何や、もう戦争が終わつた」て、聞きましてん。米軍が飛行機やヘリコプターで「ばあっ」とビラを撒いたらしいな。「戦争が終わつたから下りてこい。おまえらには罪がないから、下りてきたら、食料などを与える」と書いたあつたそうや。それで、

山を下る途中（投降のための移動中）の小休止（休憩）で、身体が疲労してたさかい、みんな「ごろーん」と寝てたんや。そやけど目が覚めたら、誰もおれへんかった。部隊がわしを置いて進みよったんや。それで、同じようにはぐれた兵士4人と一組になって、山を下りたんや。

（山麓へ）行ってみたら、黒人の兵士が鉄砲を構えて「カモン。ユー、カモン」て言わはるし、そらあ怖い。怖い。持ってた物を全部取られて、大きい6輪トラックに乗せられましたわ。

終戦当時、フィリピンのジャングルに潜んでいた日本兵の中には、集落・耕地からの食料略奪や、住民への暴行、殺害を行う者もいました。野村和男さんは捕虜収容所への移送中、日本兵に対するフィリピンの人々の怒りを身をもって知りました。

（捕虜となった頃、）片方の足が怪我と熱帯潰瘍で腫れてたんや。そんで、引きずりながら歩いてたらみんなより遅れますやろ。すると、フィリピンのおじいやら、おばあやら現地住民が「ジャパニース、バカヤロウ」と言うてな、竹なんかを持って叩きに來よったんや。それでMP（米軍憲兵）が、わしを叩かさんように監視してくれよってん。



マニラへ向かう直前の野村和男さん
（昭和18年5月撮影・当時14歳）

第2節 各地の捕虜収容所

1) 捕虜収容所と復員・帰国

『武装解除』された日本軍兵士は、捕虜収容所へ送られて使役されながら帰国を待ちました。ポツダム宣言の降伏条件には『兵士を捕虜とすること』はなく、むしろ『武装解除された後に、兵士たちは各家庭へ帰り、平和な生活を送ることができる』と記されています。それではなぜ、兵士たちは捕虜生活を送ることとなったのでしょうか？

その理由は、引揚船がなかったことが挙げられます。当時の日本には海外で復員を待つ353万人もの兵士を運ぶ船がなく、引揚船のめどが立つまでの間、日本軍兵士は戦地に捕虜として留め置かれました。昭和21年（1946年）春に米軍兵士の帰国が一段落すると、米軍艦船が大量に投入され、日本軍兵士の復員は一気に加速します。そのため、フィリピンからの復員は、昭和22年（1947年）末までにはほぼ終了しました。

次の理由は、戦勝国のなかに日本軍兵士を捕虜として安価な労働力として使役する思惑があったことが挙げられます。米国や中国は、戦後のアジア地域の安定化をはかるため、自国の領土から早期に日本軍兵士を帰国させる方針を取りました。一方、英国やオランダは、戦争によって荒廃した植民地の復興に一定期間、捕虜を使役しました。また、ソ連は、戦後の資本主義諸国との対立を見据えて、日本人捕虜を自国へ連行し、シベリア・極東地域の開発に酷使しました。その結果、日本人捕虜の復員・帰国完了は、ビルマ（英国領）では昭和23年（1948年）まで、ソ連では昭和31年（1956年）まで引き延ばされたのです。

2) 中国では一慈愛と徳一

【体験談一助けた赤子に助けられて一】

脇坂 利一さん（東近江市）

【捕虜収容所】なし（中国浙江省舟山市付近に残留）
特攻直前で終戦となり、命が助かった脇坂利一さんはその後も思わぬ幸運に恵まれました。

昭和20年（1945年）6月7日に（中国浙江省での）温州作戦に舟山島の警備隊のなかから応援に出よという命令が伝わってきたんや。作戦に出るのは出た

けども、戦果があったか分からん。で、「もう、いもう（帰ろう）」、て戻って来た。その途中に、子どもが泣いってな。先任下士（下士官）が「民家の近くで赤子の泣き声がする」と言ったんや。ほんなら、ほんまに赤子が、親の乳房を吸っとるんやけど、母親が死んでたんや。死んでる母親の乳首をいくら吸うても、乳出えへん。それ見たときにはほんまに、ああ、戦争てのはこんなことになんのかなと。もうかわいそうでよ。わしはまだ子どももなけりや所帯も持ってやせんなんやったけども、ほんまに涙がこぼれた。こら、もう、こいつ助けようと思った。

（部隊の）みんなで毛布やらタオルにくるんで連れて帰って、杭州のとあるとこへ預けてたんや。

終戦で昭和20年（1945年）9月1日に（部隊は）武装解除して、武器皆取られてもうたけど、それから2日経って、助けた子どもが村長の孫やと分かったんや。それで、「おまえらは、わしの孫を助けてくれたで、おまえらだけは別格扱いや」って。ほんだらほんまに、拳銃やら何から、私らだけは持たせてくれた。で、外出も自由。元の兵舎で暮らしてましたんや。ほかの兵士は全部、有刺鉄線だよ。「収容所より一步も出ることならん」と。いまだに忘れられへん。

「やっぱり人間の情を加えたらなんたらあかん」ということをこの年になってつくづく思いますわ。

【体験談—日本やったら、そんなことしたやろか？—】 平塚 廣さん（長浜市）

【終戦場所】 中国 宝慶（中国湖南省衡陽市付近）

【捕虜収容所】 中国 鹿角（中国湖南省岳陽市）

昭和18年（1943年）に中国の部隊へ配属された平塚廣さんは2度の負傷や感染症（腸チフス）など、戦場で命を危険にさらす日々を過ごした後、中国の奥地（湖南省衡陽市付近）で終戦を迎えました。

昭和20年（1945年）8月16日に大隊本部へ行きましたらな。「日本は負けた」ということを知らされたんや。「無条件降伏した」とね。そら、びっくりしましたな。僕らは第一線（最前線）にいたし、もう内地（日本本土）へは帰れへんと思いましたな。負けてもたんやからね。

私らも、相当ひどいことしてきましたでね。後方

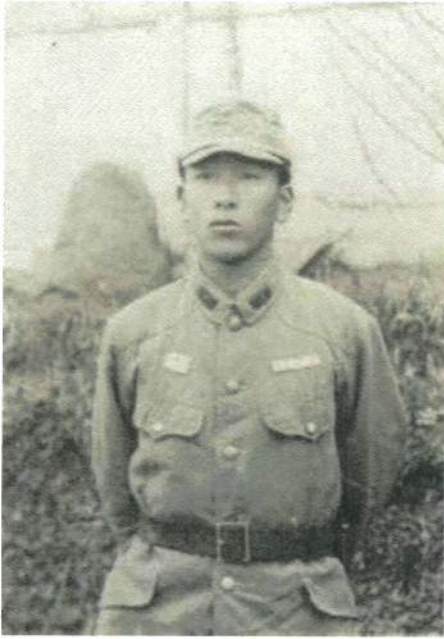
からの糧秣（食料）輸送も何も来ませんから、毎日毎日、現地調達ですわ。『調達』て、ええ名前ですけど、『略奪』ですわな。部落に入って畑（の作物）やら、豚や水牛やらを手当たり次第、取って食べなしようがない。兵隊が各班に分かれ、武装して、取りに行くんです。兵隊の数は多いから、1部落に入っ、あっちやらこっちやら行ってね。気の毒やけど、僕らもしようがない。取らな食えんのやで。

それから、洞庭湖東岸の鹿角に集結させられて武装解除や。武器をみな出さんならん。皆もう、反抗はできませんのでね。為すがままやでね。向こうから支那兵（中国国民党軍の兵士）が来ましてね。身体検査や所持品の検査ゆうて、めばしい物はみな、没収されて丸裸になってしまいました。

（10月から昭和21年5月頃まで）鹿角の捕虜収容所やった。中国軍に監視されてるわけです。僕ら大勢やで、各民家に土間みたいな空いたところありますわな。土間に藁を敷いて、そこで毎日、毎日寝起きしてたんです。何人かずつに分かれてね。けど、幸い（捕虜収容所では）、三度の飯は食わしてくれよったし、それらしい虐待もなかったしね。わりあい紳士的に扱うてくれはったですわ、毎日毎日ね。「リクレーション」いうか、草野球みたいなこともさしてくれよったしね。

負けてるんやでね。ソ連みたいこ、虐待されて使役に使われてもしようがないもんね。私は感謝します。やっぱり、人間らしい扱いをしてくれよったで。蒋介石様々やと思ってます。

私ら、家は破壊し、田んぼの牛は殺す。豚は殺す。せつかく作った米は取ってしまう。現地ですわ。そういう目に遭うてる被害者がいるわけですわ。それに対して、いくら今ゆうたところで、そういう悲惨な、残酷なことをされた人は、忘れられんわね。もし、「逆やったら。日本やったら」ようしませんで。民家の空き場所に、敵兵を入れてね。差別せんと生活さしてくれて。そこが中国人の国民性いいますか、度量の広いとこでしょうな。「日本やったら、そんなことしたやろか」て、思いますな。



陸軍へ入隊した頃の平塚廣さん（初年兵）



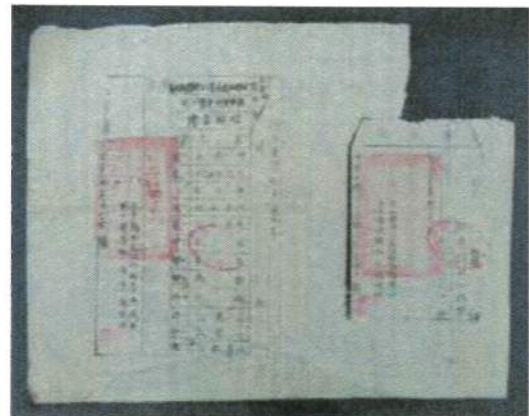
捕虜収容所の野球を楽しむ日本軍の兵士たち



捕虜収容所での野球観戦（部隊副官とともに）



名札 捕虜収容所で身に付けていた名札

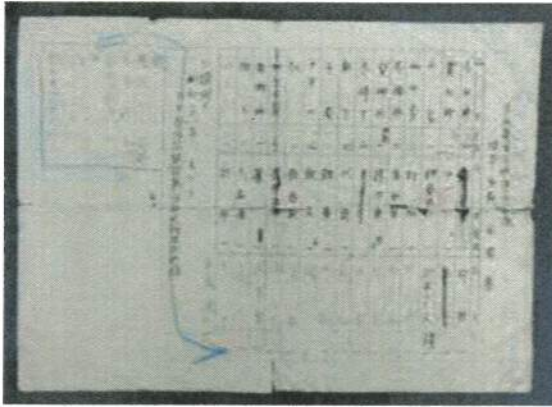


上：平塚廣さんの許可携帯物品一覧表 中国の担当官が出国時に作成（中華民国35年（1946年）5月5日）

下：北村昌博さんの許可携帯物品一覧表 中国の担当官が出国時に作成（中華民国35年（1946年）4月17日）

帰国する兵士たちの所持品を中国側が検査した書類です。

中国の捕虜収容所関係資料



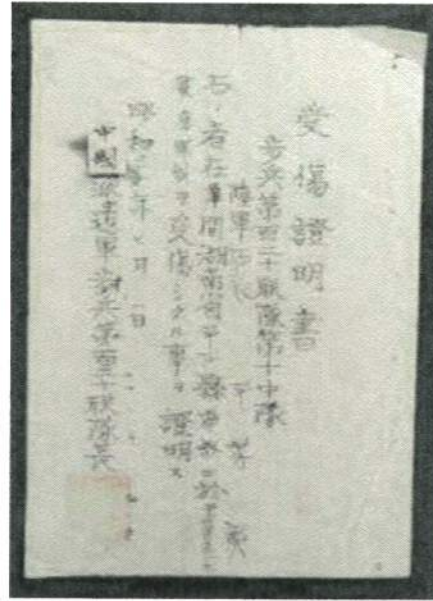
私物品明細書 復員時に日本軍部隊が作成したもの
日本軍が帰国した平塚廣さんの所持品を検査した書類です。



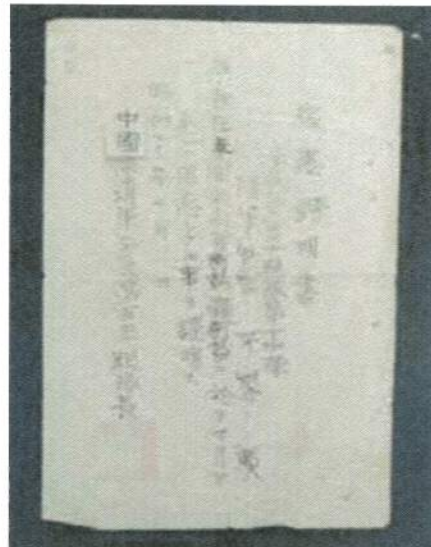
従軍証明書
帰国時（昭和21年6月30日）に部隊長が発行



引揚証明書
帰国時（昭和21年6月30日）に引揚援護局長が発行



受傷証明書 帰国時（昭和21年7月1日）に部隊長が発行



罹患証明書（マラリア熱）
帰国時（昭和21年7月1日）に部隊長が発行

平塚廣さんの帰国・復員時の書類



フィリピン ルソン島の人々

3) フィリピンでも 一住民感情と戦犯一

戦争犯罪の追及

戦争犯罪はA級『平和に対する罪』やB級『通常の戦争犯罪』、C級『人道に対する罪』の3つがあります。戦後、戦争犯罪で裁かれた者の大半がBC級戦争犯罪者でした。その数は約5,700人に及びます。

戦争中、兵士たちは後方からの食糧補給がない中、命令に従って食糧を現地の集落・住民から調達しました。戦後、調達が強奪や窃盗に及んだとして、戦争犯罪者として裁かれた者もいます。また、フィリピンの密林に敗走した部隊・兵士の中には、敵に見つかることを避けるため、住民への暴行・殺害に及ぶ者もいました。捕虜たちはそれらの行為のほか、捕虜・住民への虐待や、強制労働、強姦など様々な罪で戦争犯罪者として裁かれました。

【体験談—なぜか？戦犯収容所へ送られました—】

野村 和男さん (東近江市)

【捕虜収容所】タクロバン収容所 (フィリピン レイテ州タクロバン)

昭和20年(1945年)12月、野村和男さんたちはカガヤン(フィリピン カガヤン州)の捕虜収容所から船で移送されました。ところがそこは…。

われらは(日本へ)帰れると思っていた。「復員できる。もうそら、ありがたいな」と思ったわ。ところが行ってみたら、鉄条網が2重に張ってあるタクロバンの収容所やったんや。「なんでこんな所へ入れよるんや。これ、何や」て、言ったら、(米兵が)「戦争犯罪人はここや」と言いよるんや。そんで「こら困ったことやなあ。われら少しもそんな悪いことしてないのにな」と思いましたわ。帰るまでここに1年ほどいましたな。

(収容所では)フィリピン人がずうっと(次々と)来て、みんなの顔を覗むんやわ。首実検(被害者による容疑者の確認)や。そんで、悪いことした人(犯人)を「ユー、カモン」って引っ張りよる。すると、今度は裁判になるわな。わしは何もしてなかったけど、「間違いよったらかなんわな〜」て、思ってた。戦争犯罪とは無関係だった野村和男さんの収容所での生活は…

毎日、仕事がありましたけど、わしは米兵から見

たら、ほんまに子どもに見えたんやろな。それで、わしを「ベビー、ベビー」と呼んでた。そやから「野村、おまえはえらい(しんどい)仕事させられない。将校の幕舎(テント)の掃除や洗濯や」ってなつてな、将校からタバコやチョコレートをもろたりしてたんや。ほかの人はそんな物当たらへんわな。

その次は米軍用の炊事場へ行かせてくれたわ。捕虜はビスケットや大豆やどろっとしたメリケン粉(小麦粉)が入っているレーション(缶詰)やったけど、わしは(米兵の料理の残りの)ベーコンやらハムやらハンバーグやらを食べてましたわ。でも、なんぼ良い待遇でも「早よ、日本へいいたい(帰りたい)な」と思っていましたんよ。

昭和21年(1946年)12月、タクロバン収容所の閉所とともに、野村和男さんは帰国の途につきました。

いつまでたっても、(復員の)呼び出しがありませんのや。結局、タクロバン収容所の一番最後やった。われらはテントやなんやちゃんとして(片付けて)から戻りましたんや。

わしが生きてることは、収容所で一緒やった近所の方が先に戻ったさかい、家の者も知ってたけど、35~36歳やった親父が「ひよっとしたら、また召集されて戦争にいったかも」て、家のことが心配やったんや。

家に帰ったら、親父もお母さんもいてた。そら皆喜んでな。その晩はいろんな話したな。そら、話しかけたら尽きることないからな。



タクロバン収容所での野村和男さんたち



パナー：フィリピンの捕虜収容所での暮らし
 フィリピン マリキナ捕虜収容所での炊事場風景
 昭和21年（1946年）8月頃撮影



直木清さんがフィリピンの捕虜収容所で米軍から支給された食器など

パナーは捕虜収容所でパンを焼く直木清さんたちの姿です。収容所では米軍兵士用のフライパン・食器セットやスプーン、水筒などを支給され、自分たちで食べ物を料理していたそうです。



福岡敬さんがシンガポールの捕虜収容所で使った弁当箱・水筒

捕虜収容所で支給された食料の缶詰の空缶で作った弁当箱と日本軍の水筒です。

野村和男さんの工具細部心得（大阪陸軍航空廠八日市分廠）

4) ビルマの捕虜収容所—使役と交流—



ビルマ アーロン収容所の捕虜が着ていた作業服

小林育三郎さんがビルマ アーロン収容所で着ていた作業服です。残念ながら、この作業着には、傍嶋富士男さんの絵に描かれた『赤丸の布』を縫いつけた痕跡は確認されていません。



小林育三郎さんがビルマ アーロン収容所で使っていた食器



ビルマ アーロン収容所に収容された傍島富士男さん関係資料

労賃支払明細書 英国が発行した傍島富士男さんのビルマでの労役の労働賃金の明細書です。

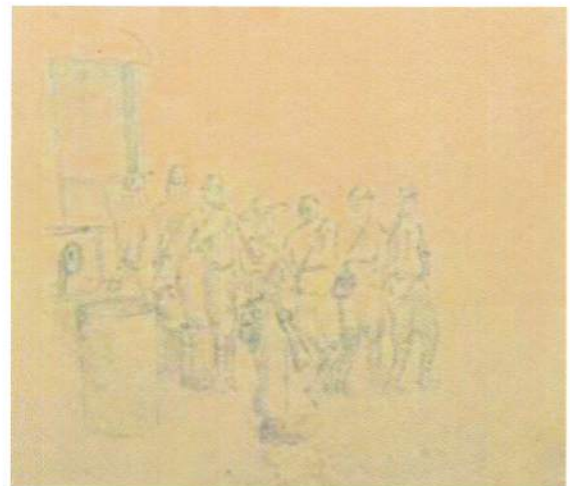
事実証明書 (昭和21年3月3日)・**復員証明書** (昭和22年7月24日)・**証明書「武器禁制品ヲ所持シアラザル事ヲ証明ス」** (昭和22年6月)



スケッチ「捕虜収容所」【アーロンキャンプ (収容所)】

捕虜として収容されていた傍島富士男さんがビルマ ランゲーンのアーロン収容所を描いたスケッチです。収容所内からは正面に2階建ての収容所長官舎が見えました。その右手前にはグルカ兵 (英国領インド軍兵士) の衛兵所があり、出入口の左側には英国国旗が掲揚されています。

捕虜となった日本軍兵士たちの宿舎は描かれていませんが、竹を用いた柱や壁にヤシの葉を葺いた屋根をもつ粗末な建物でした。傍島富士男さんは、「収容所が市内のゴミ処理場の横に設置されていたため、ハエの多さに大変弱った思い出がある」と回想されています。



スケッチ「屈辱的な作業服装」

当初、日本人捕虜たちは作業衣の背中に、支給された赤い布を日の丸のように縫いつけて作業に当たることを命じられました。傍島富士男さんはこの服装を「現地の人々への見せしめか、日本人への侮辱」と感じたそうです。

収容生活の様々な待遇改善の要求は、捕虜からYMCAを通じて当局へ行われたそうです。この服装も4~5ヶ月後には取りやめとなり、傍島富士男さんはYMCAの実力に感謝したそうです。



スケッチ「グルカ兵の監視下での労役作業」

グルカ兵 (英国領インド軍兵士) の監視の下で市街地の清掃作業を行う日本人捕虜の姿です。労役のなかでは比較的に良い部類の作業でしたが、ビルマの真夏の暑さとゴミの臭気で作業後は、しばらく食事のどを通らなかつたそうです。労役作業には、重労働の作業とともに、侮辱的な嫌がらせを感じた作業もあり、精神的にも苦痛だったそうです。



清水慶治郎さんが捕虜収容所に持って入った第 53 師団工兵第 53 聯隊の印

【体験談—インド人下士官との交流—】

熊谷 直孝さん（長浜市）

【終戦場所／捕虜収容所】ビルマ タトン県

（ミャンマー モン州タトン付近）

早稲田大学在学中に学徒出陣された熊谷直孝さんは、陸軍予備士官学校での訓練を経て、昭和 20 年（1945 年）8 月 16 日、ビルマ（現在のミャンマー連邦共和国）の部隊へ配属されました。

（部隊に着任した 16 日の）夜中、大隊長が連隊本部に呼ばれたんです。大隊長が帰って来ると、「将校集まれ」て、「実は日本は全軍が負けたんや。武装解除があるということや。」といわれたんです。

それから後は、英印軍（英国領インド陸軍）の指揮下に入るんです。命じられて、タトン県の師団の集結地にぞろぞろ集められて、師団全員が捕虜ですわ。「戦争は終わった、万歳！助かった！」というような有頂天な思いではなかったですが、まあ、「ほっとした」というか、「終わったんか」という感じでしたね。捕虜の身分になるのでしょし、ちゃんと日本まで運んでくれるのかわかりませんしね。そら、不安はありましたね。

捕虜になって、ピリン〜パブン山道に道路作業に行きました。使役は、毎日ありました。炎天下に、禪姿で労働作業で、時折、英軍将校が 1 名、ジープに乗って見回りに来た。ただ、10 日に 1 日ぐらいは休みがありました。休みあったって、食べる物も何もないし、演芸会をする気力もないし、ただごろんとしてるだけでしたけどね。

現地のビルマ人は温厚で親切な人が多くてね、日本が戦争に負けても、けっこうよくしてくれました。

占領軍の兵隊は、将校がイギリス人で、下士官兵がグルカ兵というインド人でした。だから、下士官はへたくそな英語を使うわけですよ。すると、こっちもへたくそな英語だから、かえって話がわかるんですよ。それで、向こうの（インド）パンジャブ（州）出身の下士官と仲良くなりました。すると、食べ物やら石鹸やら、いろんな物くれたりしましたね。（捕虜と向こうの兵士は）あんまり接触させないようにされていたけど、「これは内緒だから、隠して持って行け」とか言われて、お互いに隠れてやってた。

英軍の下士官が持ってた英語とビルマ語の簡便会話用例集のようなものがあつたんです。欲しかったので「くれくれ」とやかましく言ったら、くれたんです。ポケットに入るサイズの 24 ページの冊子です。これは日本軍の誰も持って帰ってないと思う。日本軍では、戦陣訓とか軍人勅諭とかはあつても、こんな実用的な現地語の会話集なんて、気の利いたものはなかったね。

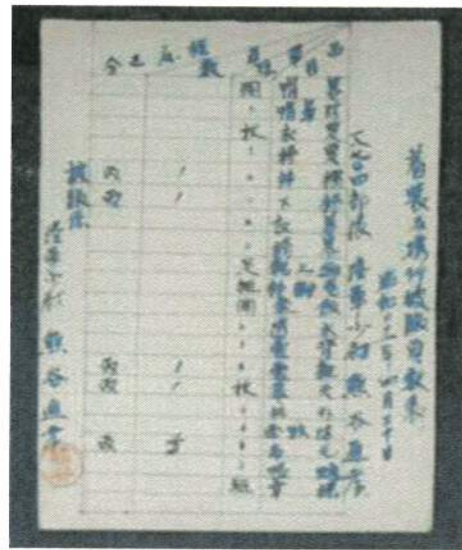
帰る時に住所を交換して、帰ってから手紙を出したんだけど、返事は何も来なかった。今でもそのメモは持ってるけど。そんな付き合いもありました。



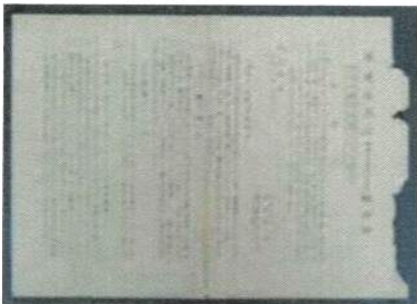
熊谷 直孝さん（入隊後）



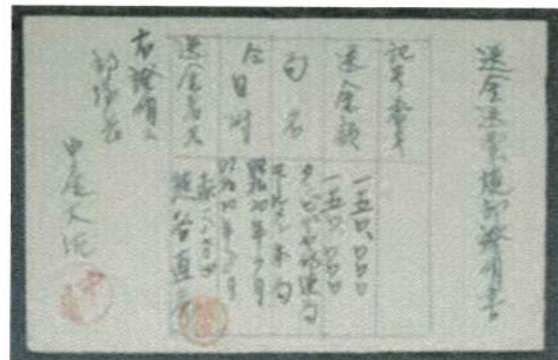
熊谷直孝さんと英印軍インド人下士官の交流
外出用腕章、インド人下士官2人の連絡先、
英語ビルマ語会話集



着装及携行被服員数表 (昭和21年4月30日)
帰国時に発行された持物リスト



報道部通信 (昭和20年9月3日)
ビルマの捕虜収容所で発行された新聞



送金送票焼却 (償却) 証明書
現地からの送金の受け取り証明書



英字通信誌 [FAUJI AKHBAR] 12th February 1946
ビルマの捕虜収容所で発行された1946年2月12日発行の
英字新聞



旅行者外食券 (自昭和21年3月1日至8月31日)
復員者に渡された外食用の食券
熊谷直孝さんの捕虜収容所・復員関係資料

5) ソ連による抑留【シベリア抑留】

昭和20年(1945年)8月9日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄し、満洲(中国東北部)や朝鮮半島北部へ侵攻しました。終戦後、ソ連軍の捕虜となった日本軍兵士や民間人は約61万1千人と推定されます。そのなかで、ケガや病気の人を除いた約57万5千人もの方々が、ソ連の指導者スターリンの指示のもとソ連領内やモンゴルへ移送されました。

捕虜たちは、シベリアなどの極寒の地で十分な食料も与えられず、劣悪な環境のなか森林伐採や鉄道建設、建物建築、工場労働など様々な重労働を強いられました。抑留中の死者数は5万5千人と推定されます。抑留者の多くが捕虜となった時の夏服のまま極寒のシベリアなどに移送されたため、厳しい冬の寒さのなか、最初の冬だけで5万人近い人が亡くなりました。

一般に『シベリア抑留』と呼ばれますが、捕虜たちの抑留場所はカムチャッカ半島南部からカザフ共和国までのソ連領内とモンゴル人民共和国の極めて広い範囲に及んでいます。

【体験談—自爆攻撃をすることになっていました—】
山中 隆一さん(甲賀市)
【終戦場所】樺太 豊原(ロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク)

山中隆一さんは、樺太でソ連軍との戦闘中に昭和20年(1945年)8月15日を迎えました。

我々(の部隊50~60人)は、最前線の豊原(現在のロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク)にいてた。そこで四角い段ボールみたいなカーリットという爆薬を首に掛けてな、戦車が来たら木の陰からぱっと飛び込むことになってたんや。戦車にキャタピラーがあるやろ。火薬に火をつけてな、それ目掛けて飛び込むねん。今、思ったら自爆やな。それで8月17日が我々が出る(出撃する)日やってん。前の晩にみなで「さよなら、もうどうせ死ぬやろう」で言ってたぐらいや。そしたら、終戦になって良かったけども。こんな…神さんのお陰か誰のお陰か知らんけどな、命拾いさせてもらうたわ。今はおかしいけど、あの時分は死ぬのがあたり前やったなあ。国のために死ぬんやと思ってた。

次に「高等女学校の方へ武器弾薬持って集まれ」という、(上官からの)命令や。行ったらな。学校の前に銃を持ったソ連兵がダーッとおるんや。それで捕虜になったわ。みんなを全部、運動場へ並べさせよったんや。日本人捕虜のこれからの段取りの説明が終わってよ。部隊で「ヨシ」と掛け声があったから、みんな立ちよってん。そしたら、(隣接する)山で機関銃そろえて番兵してたロシア人が、(日本人が)暴動を起こしたと思って、「バラバラバラ」と機関銃で撃ってきよったんや。日本の軍隊は、「立て」いわれたら、みんな立つわな。我々は後やったで良かったけども、撃たれてようけ死んどるで。



山中隆一さん(当時23歳、左側の人物、昭和19年大阪での防空勤務時に撮影)



戦車に白兵戦を挑む日本軍兵士たち(ビルマの戦場にて)



ソ連の日本人捕虜収容地区に見る今回紹介した方々の抑留先 (『シベリア抑留』長勢了治 (2015) より一部改変)

【体験談—サハリンでの抑留生活—】

山中 隆一さん (甲賀市)

【捕虜収容所】オハ収容所 (ロシア連邦サハリン州オハ)

当時、23歳だった山中隆一さんはソ連軍の捕虜となって連行されました。

そして、貨物船に乗せられて、オハ収容所 (現在のロシア連邦サハリン州オハ) に送られた。そこは電気も明かりもないけど、物凄い石油が「ガボガボ、ガボガボ」出るねん。そこで建物を建てたり、ボーリングの仕事をしたり、石油の仕事をやらされた。石油でかぶられて、身体中が真っ赤な色になってしまったな。

(一日分の食料は) 五枚切りのパン1切れぐらいやった。酸っぱい、酸っぱい黒パン一切れや。はじめは食べられへんかった。腹が減ったというちゅうのは哀れなものよ。人間の最低やな。道端のものが食べ物に見えるんや。草を「ガッガッ」とむしってな。そのまま石油の蒸気で煮て、味も付けんと食べんねん。「そんなの食べたらかん」と、ロシア人に怒られたわ。嘘のようやけど、夜勤の奴がよ、食堂の (そばにあった) 凍ったあるモノを「ジャガイモや」と思って持って帰ってきたんや。自分ひとりで食べようと思って。そしたら馬糞やっせん。腹が減ったらそんなもんや。(あの空腹の辛さは) 捕虜

になった者やなかったら分かりやせんわ。

(仕事では) 一日分のノルマがあったんや。まあ、酷いわ。木の伐採でもノルマがあんねん。四国のミウラちゅう子とわしが一緒に組で伐採の仕事しててん。そやけど、(彼が) パタンと枝にもたれとってん。「おい、何してんやー」言うたら、栄養失調で死んどんねん。1人おらんで仕事の量 (ノルマ達成) が出来んやろ。(収容所へ入ろうとしたら) 門衛でストップされて、牢獄 (懲罰房) や。晩御飯あたへんで、毛布一枚もないんだぞ。零下何度のところだよ。一晩明かして、朝はまた同じ仕事に連れていかれるんや。まあ酷いわ。

【体験談—思想教育と引揚げ後—】

山中 隆一さん (甲賀市)

【捕虜収容所】オハ収容所 (ロシア連邦サハリン州オハ)

わしは背が小さかったさかいに、『マーリング・ソルザート (小さい兵隊)』と呼ばれてたんや。人気があって、大事にしてもろうてたんや。わしは日常の仕事も良いし、人の付き合いも良いしということで、部屋長に選ばれたんやわ。一部屋に25人位いたのかな。それで思想教育の真似をせんならんや。(部屋長がソ連の担当者から) 半日教育を受けてな、今度は晩にみんなが集まったところで、思想教育をする

ねん。(前は)「そんなソ連みたいな奴にかなんわー(嫌やわ)」と、いったけど、やっぱり「郷にいたら郷に従わなあかんぞ(郷に入れば郷に従え)」と思って、みんなに「お前も誠意みせなあかんぞよ」て、やかましくいった。

まあまあ一生懸命、仕事してたさかいに、引揚げで一番先に呼ばれたのはわしやっせん。(昭和28年(1953年)頃?)、その日の朝は収容所長がわしの足を見て、「山中、待てー」て、奥さんが奥から「山中、はい靴」と新しい靴を持ってきてくれたんや。我々に着てる物を脱げていって、全部新しい服をくれた。所長夫妻は良い人やったわ。収容所で日本人の演劇を見て、嫁さんが舞台上上がってきてよ。「日本人かおいそう。こんな所にいるのは、かおいそう」て、泣いて泣いてな、ほんまにもらい泣きたわ。所長も同じように泣いてよ。

引揚げて来たら、検査されたわ。仕事中に拾った(スターリンの)メダルを持って引揚げて来たんや。(入国時に)素っ裸にして服装検査しやるやろ。そしたらメダルが見つかって、「これなんや」て言われて、「道で拾うたんや。」て、言ったけど、別室に連れていかれたわ。家に帰ってから警察に呼ばれたで。

(帰国して)函館から家にはがきを出してたんや。(村の)辻の所の先まで帰ってきたらよ、お父さんが迎えに来てくれてはってん。「兄かー」といってよ。あんな嬉しいことはなかったわ。4年も5年も離れてたんやさかいに、親もどんな気持ちやったやろと思うわ。もし、自分が死んでたら、どんなことになってたことか。そりゃ戦死しはった人の親は、どんなんやと思うわ。今、思ったら気の毒でな。

6) シベリアの風景

—シベリア出兵時(1920年頃)の写真—



シベリアの冬の木立(1920年頃撮影)



シベリアの街とみられる風景(1920年頃撮影)



ロシア人女性(1920年頃撮影)



馬ぞり(1920年頃撮影)



シベリア鉄道エフゲネフカ駅(1920年頃撮影)



ウラジオストクの街並み
(エゲリエド税関倉庫付近 1920年撮影)

7) ソ連での抑留者の生活



ウズベキスタン共和国のベカバードで抑留された北島敬三
さん関係資料

上：北島敬三さんが送った俘虜用郵便葉書

下：抑留中に使っていた水筒

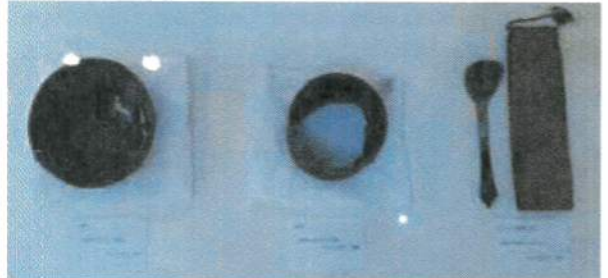


左：北島敬三さんの外套（コート）

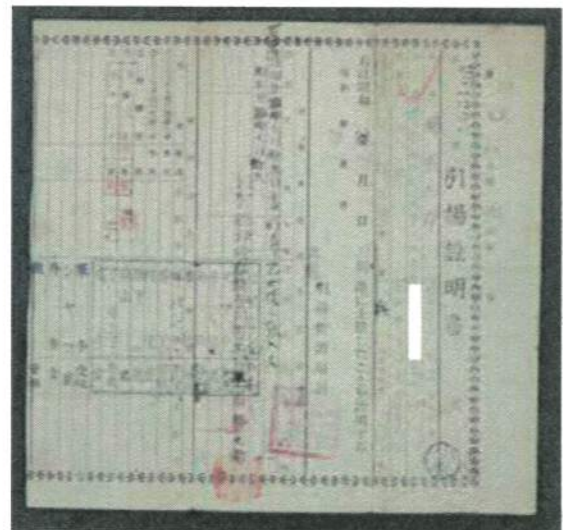
抑留中、日本軍の外套で冬の寒さをしのぎました。

右：抑留中の片山三次さんの服装（防寒帽、外套、防寒袴）

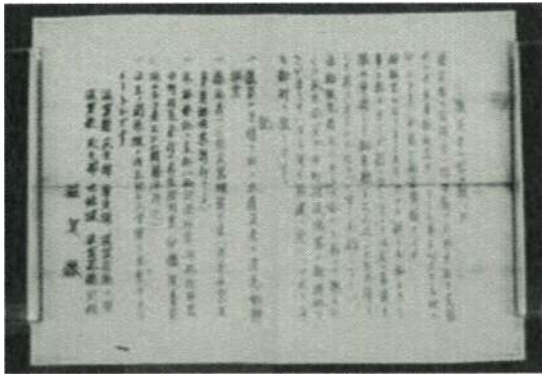
日本軍の外套や満洲で作られた支給品のズボンなどです。
破れを自分で縫って着ていたそうです。



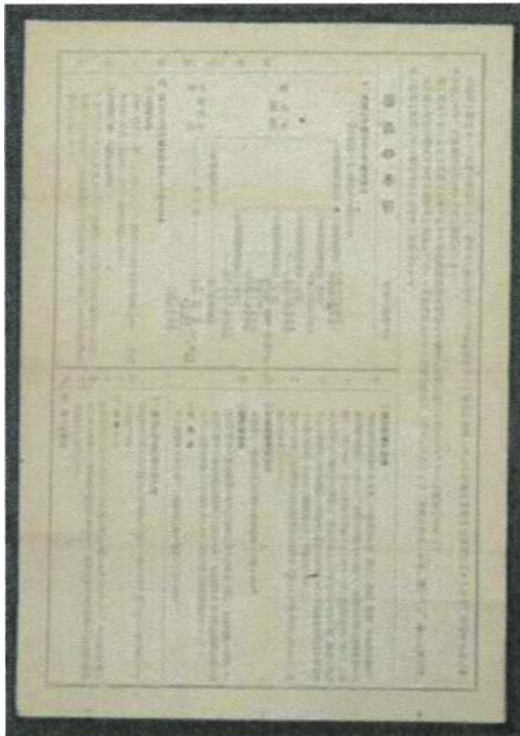
片山三次さんがシベリア抑留中に使っていた食器・スプーン



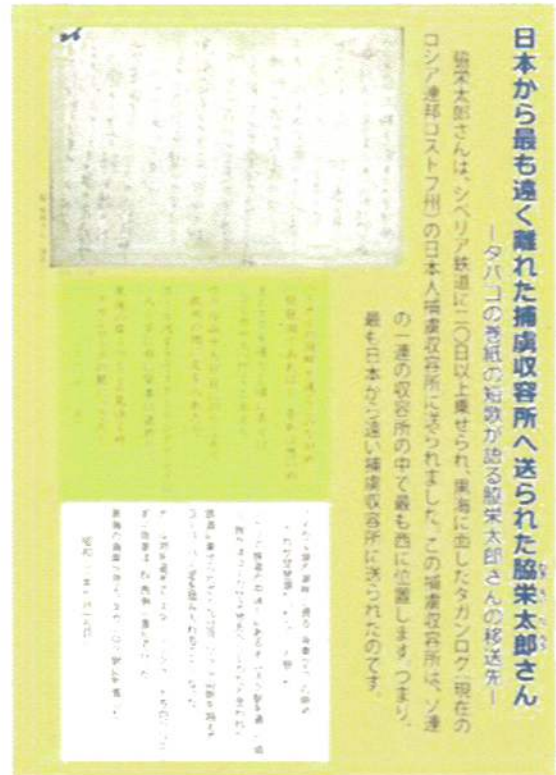
引揚証明書（脇柴太郎さん関係資料）



復員者の皆々様へ（脇栄太郎さん関係資料）



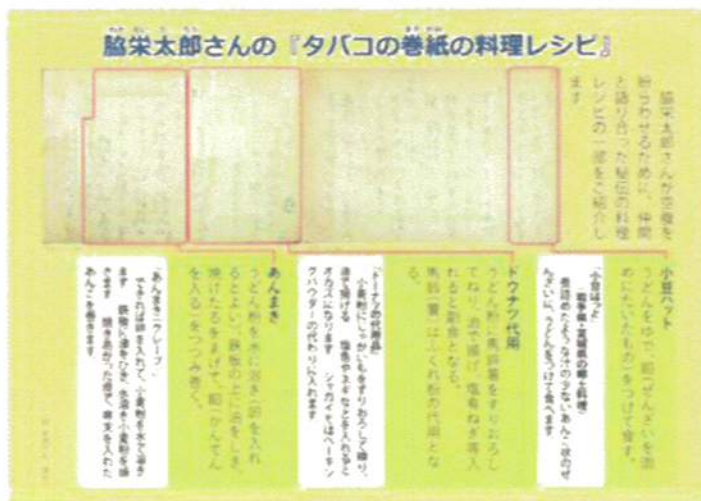
復員の手引（脇栄太郎さん関係資料）



日本から最も早く離れた捕虜収容所へ送られた脇栄太郎さんの『タバコの巻紙の料理レシピ』

脇栄太郎さんはソ連での抑留中、食事も満足に食べられない生活を送られました。仲間との語らいで話題となった料理の作り方や自作の短歌・俳句・川柳などを『タバコの巻紙』に書き記しました。

昭和23年（1948年）7月、脇栄太郎さんは、『タバコの巻紙』を背囊のベルトに隠して帰国されましたが、その後すぐに抑留中の栄養失調が原因で亡くなられたそうです。



脇栄太郎さんが抑留中に短歌や料理レシピを記した『タバコの巻紙』



田中清さんが強制労働に従事されたシベリア コムソモリスクの煉瓦工場（平成17年8月撮影）



左：田中清さんがもらった防寒着



右：抑留後の田中清さんたち

田中さんは写真左側の人物 当時21歳、シベリアから帰国された友人3名で帰国2ヶ月後の昭和23年1月に撮影



抑留中に亡くなられた方々の埋葬地
（コムソモリスク北方のフルムリ、平成17年8月撮影）



田中清さんが約1年間過ごされたコムソモリスク第2収容所跡（現在は刑務所となっている。平成17年8月撮影）



シベリア コムソモリスクの病院収容所跡
（平成17年8月撮影）



タバコ（空箱）、捕虜収容所で自作した楽しむための道具

8) 捕虜収容所での余暇の楽しみ

ビルマのアーロン収容所で自作した碁盤・碁石

ビルマのアーロン収容所で捕虜生活を送られた小林育三郎さんが、収容所で自作した碁盤と碁石セットです。小林さんたちは使役労働の合間に仲間と囲碁を楽しまれたそうです。



碁盤
収容所にたくさんあったラワン材の板切れを使用。裏面には線画がついており、折りたためます。

碁石を入れる箱
箱の表面に英国製タバコの空箱紙を裏紙として貼りがけする。

碁石
段ボール紙を丸く打ち抜き、湯かしたロウに漬けて完成



白色の碁石 黒色の碁石



碁盤表面



碁板のふくろ



碁石のふくろ

碁盤・碁石を入れる袋
パフジャケットの布を手縫いで作製




(小林 幸子さん 提供)

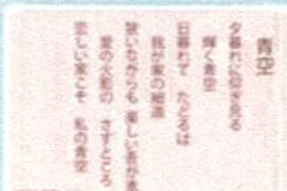


【参考資料】内林義幸さんがシベリア抑留中に自作したマージャン牌

傍島富士男さんの『SONG BOOK』

小林育三郎さんと同じアーロン収容所で傍島富士男さんが書き記した歌詞集です。この中には戦前、日本でもヒットした『青空』（『私の青空』作詞：ジョージ・A・ホワイティング、訳詞：堀内敬三）の歌詞ものっています。仲間とともにふるさとを想って歌ったのでしょうか。








北村昌博さん自作の花札

北村昌博さんは、戦争中に諜報部員として蒙古へ潜入し、現地人として暮らしていました。この花札は戦後、中国の捕虜収容所で収容生活を送っていた時に、厚紙を使って自作されたものです。細かい絵も丁寧に描かれていますね。

9) 捕虜収容所で作った手帳


こばやし いくさぶ ろう
小林育三郎さんの日記帳

戦場でも一日も欠かさず日記を書いていた小林育三郎さんは、ビルマのアーロン収容所でも日記帳を手作りしました。しゃれた表紙は英字新聞やタバコの箱を貼り付けたものです。



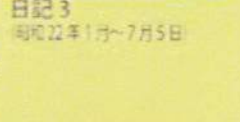
日記 1
昭和20年8月～12月

新聞を貼った日記




日記 2
昭和21年1月～3月15日

タバコ箱を貼った日記



日記 3
昭和22年1月～7月5日



日記 2 昭和21年2月5日の記載

(本間 京子さん 提供)

新聞を貼った日記 (昭和20年8月～12月)、タバコ箱を貼った日記2 (昭和21年1月～3月15日)、日記3 (昭和22年1月～7月5日)

2月5日 ランゲーン(97)収容所の第37班作業
起床前、朝の暗い時間に起き出して曇盤磨きた。
昨日に線を引いた感では、ちよつと曇盤の目か小さいので、石ケンと砂とで磨いて線を消して、黒ペンキで引き直す計画だ。
昨日の夕飯のあえて食べ残した団子2つを「何とか昼食用に」と我慢していたが、ついに耐えきれず、朝に食べてしまった。
— 中略 —
8時10分に集合。午前中はみっちり仕事がある。
(今日の仕事は)昨日と同じ鉄材の整理作業か、工場内の泥とも砂とも灰とも判らないものの運搬清掃だ。おれは今日も後者だった。昨日のように担架かと思えば、今日はV型のトロッコ。重心に帰っておもしろい。ただ、二階からトロッコに灰のようなものを入れるので、砂塵がもうもうとなつて、近づけない。このホコリには閉口。最初は何度も脱線で事故続出だったが、要領をのみ込んでスイスイ行くようになった。
この工場も着々と復旧が進んでいるようだ。今日は煙突のペンキ塗りもしている。
昼食はなし。角材を四本並べて一時間半のお昼寝。いい気持ち。午後はたらけて早く時間が経たないから、やや嫌になる。16時(に作業終了)

収容所で記した小林育三郎さんの日記 (昭和21年2月5日の記載内容)

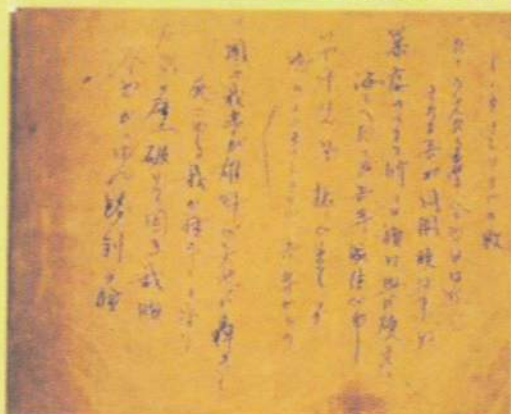
やま なか りゅういち

山中隆一さんの手帳



山中隆一さんがサハリンのオハ収容所での抑留中にセメント袋の紙で作った手帳です。

ソ連の思想教育で習われたと思われる労働歌とともに、収容所でいっしょに過ごされたと思われる方々のお名前や住所が記されています。



インタナショナルの歌

一 たて うえたる者よ 今そ日は近し
 二 さめよ我が同胞はらがらし 時は未ぬ
 三 暴虐のくさり断つ日 旗は血に燃えて
 四 海をへたてぬ 我等髪かいたを結びゆく
 五 いでよはん いさ 振り立て いさ
 六 徳々(ああ)インタナショナル 吾等かもの

一 聞け我等が雄叫び 天地轟ととろとろきて
 二 旗かばねこゆる 我が旗手をとり
 三 狂烈の壁破りて 固き我胸かいた
 四 今ぞかゝげん 勝利の旗

(山中 隆一さん 提供)

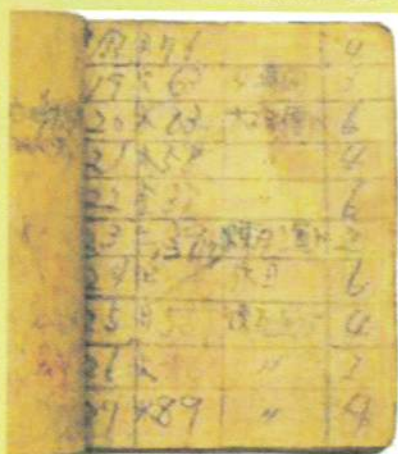
山中隆一さんの手帳 山中隆一さんがソ連での抑留中に、手に入れたコンクリート袋の紙で作った手帳です。

田中清さんの手帳



田中清さんがシベリアのコムソモリスク・ナ・アムーレでの抑留中、パン工場で手に入れた紙で作った手帳です。

簡単な日々の記録とともに、強制労働の内容やノルマ達成率などが記されています。



8/18	月	76		4
19	火	63	4時間	3
20	水	83	大2手早い	6
21	木	58	〃	4
22	金	38	〃	6
23	土	39	煉瓦運び	2
		126(7)		
24	日		休日	6
25	月	55	煉瓦運び	4
26	火	76	〃	1
27	水	89	〃	4

(田中 清さん 提供)

田中清さんの手帳 田中清さんはパン工場で手に入れた紙で手帳を作りました。

ソ連での抑留中に作った手帳

【体験談—捕虜収容所で作った手帳—】

田中 清さん（大津市）

【捕虜収容所】各地（ロシア連邦コムソモリスク・ナ・アムールほか）

満洲（現在の中国東北部）の部隊で終戦を迎えた田中清さんは、ソ連の捕虜となり、シベリアのコムソモリスクで抑留されました。その後、ナホトカやウラジオストクなどの収容所を経由して、昭和22年（1947年）11月、無事に帰国されました。

これ（手帳）はパン屋（パン工場での作業中に）に行った時とかに、そこらで紙を拾って作ったものや。ポケット入れて長いこと持ってまわってた。薪切りや煉瓦運びとか、作業（強制労働の内容）やなんかを書いてるんや。55やとか、61とか（の数字が）あるやろ。これ（ノルマ達成率）をだいたい100%にせな、飯を減らされたんや。これ（61%）やったら、1〜4級食のうちの2級食ぐらいしかもらえへんだのと違うかな。

（手帳に）書いた一革命歌、メーデーの歌やとか、民衆グループの歌、ちょっと覚えてるけどね。赤旗の歌「民衆の旗、赤旗は、」て。メーデーの歌「聞け万国の労働者、」これ覚えんならんさかい書いたですわ。

帰る時（帰国する際にソ連の）税関で書いた物とか、一切持って帰れなかったんや。もし、1人でも見つかったら、全員を奥地の伐採に廻すぞとかゆうて。そんな脅かしありましたんや。（持物検査の時に）ごそと（大量の）荷物持って来た人（帰国者）は全部調べられてたけど、私ら手ぶらみたいなもんやった。それで、「何もないか。」「ニート、ニート（ない、ない）」ていったら、探されなかったんや。それで、これだけ持って帰れた。



ロッキー山脈にあったサンドンの街

第2章 引揚げ 遠い祖国へ

第1節 戦争と日系移民

戦前、滋賀県からも多くの人たちが新たなフロンティアを求めて海外へ移住し、現地で平和に暮らしていました。

アジア・太平洋戦争の開戦によって、米国やカナダなどの多くの連合国で敵国から来た日系人に対する排斥運動が起こりました。彦根市八坂町から多くの人たちが移住していたカナダでも、日系移民たちは財産や住む場所を奪われ、ロッキー山脈の山奥へ強制的に移住させられました。戦後も東部への移住か、市民権を破棄し、日本へ帰国することを強制されました。

日系移民に対する強制収容は、米国やカナダだけでなく、フィリピン、オーストラリアやニュージーランド、ブラジル、ペルー、メキシコなどの国々でも行われました。

1988年以降、カナダや米国では首相や大統領が戦争中・戦後の日系移民に対する人権侵害を謝罪し、関係者への賠償が行われました。



サンドンの街へ強制移住させられた日系移民たち



小林菊尾さんと息子の寛さん

【体験談—戦争がカナダの日系移民にもたらしたものの—】 小林 菊尾さん（彦根市）

【住民収容所】カナダ サンドン・ローズベリー収容所ほか

【終戦場所】ローズベリー収容所（いずれもカナダ ブリティッシュコロンビア州）

昭和2年（1927年）、小林菊尾さんは夫の久太郎さんと結婚されてカナダのバンクーバー（ブリティッシュコロンビア州）に渡りました。3人の子宝にも恵まれ、幸せに暮らしていた小林さん家族をアジア・太平洋戦争が引き裂きました。

開戦の日（1941年12月8日）に午前中のwork（仕事）を終えて、駅でバスを待っていた時、「declare war（宣戦布告だ！戦争が始まった!）」と、人々が口々に叫び回っていたことをはっきり覚えています。その頃は反日感情の高まりもあって「ジャップ、撃つてやろうか」と言われたりしました。勤め先からも「私の子どもは戦争に兵隊として参加している。あなたには何の罪もないけれど、辞めて貰うより他にないのです。戦争が終わり、平和になったら、また、働きに来てください」と、丁寧に言われて解雇されました。

昭和17年（1942年）3月には、夫がロッキー山脈のブラックスパー収容所に強制連行されました。カナダ政府は「抵抗する姿勢を示さなければ、半年後、家族一緒に暮らせるだろう」と言っていたのですが、敵国でも同じ白人のドイツ人やイタリア人は収容されませんでした。肌の色が違う日本人だけが摩擦を生じさせないため、収容所に入れられたのだと思います。夫はそこで木材伐採の仕事をして、毎月20ドルを家族へ送金してくれました。

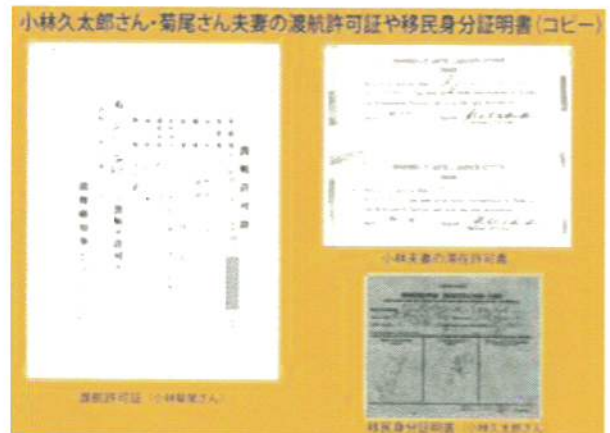
9月になると約束通り、夫は戻ってきましたが、今度は家族3人（息子2人は進学のため、日本へ帰国中）で廃坑の町サンドンへ移ることを強いられました。十分な準備期間も与えられず、バンクーバーでの生活基盤や家財の一切を失い、身の回りだけの移動となりました。

ロッキー山脈の谷間にあるサンドンの町は、鉱山が廃坑になった『ゴーストタウン』のような所で豪雪地帯でした。雪が消えるのは夏の2~3ヶ月だけで、クマやオオカミなども町の中でしばしば見かけまし

た。住居は古アパートを改造したものや、先遣隊の建てたログハウスなどで、一棟に3家族ぐらいが共同生活をしました。台所やトイレも共同でした。日系人たちの行動に対して、制約や監視の目は一切なく、周囲に鉄条網が張られるということもありませんでした。町が山奥で、隔離されていたからでしょう。

小林さん家族は、次に移動したローズベリー収容所で終戦を向えました。戦後、カナダ政府は「East or Japan」政策として、抑留中の日系人たちに「カナダ東部への移住か、日本への帰国か」の選択を強制しました。

夫はカナダに残留することを希望していましたが、（日本にいる）子どもたちと、また一緒に暮らすために2人で帰国を決めました。戦争を挟んで約20年間もカナダで暮らしましたが、私が接したカナダの人たちはみんな親切で博愛心に富んだ人ばかりでしたわ。



小林久太郎さん・菊尾さん関係資料

【体験談—2度も強制収容されたフィリピンの日系移民—】 大城 昇さん（米原市）

【住民収容所】ワガン日本人学校、ダリオンの収容所（ミンダナオ島ダバオ地方）

【終戦場所】ミンダナオ島のジャングル

大城昇さんの家族は、フィリピンのミンダナオ島で農場を営みながら、現地の人たちとも仲良く暮らしていました。昭和16年（1941年）12月8日に始まったアジア・太平洋戦争によって大城さん一家の暮らしは一変しました。

戦争が起きて、12月8日に大人も子どもも皆、ワ

ガン日本人学校（の収容所）に監禁されたんです。当時のフィリピンはアメリカの支配下に置かれていましたから。そしたら、12月20日にね、日本軍が不意打ちみたいに夜襲して、上陸してきたんや。ひどい攻撃やった。それで初めて、日本の兵隊さん見た。それから3年間ぐらい、日本軍の支配下になりました。

昭和19年（1944年）ふたたび、フィリピンが日米両軍の激しい戦場となりました。

昭和20年（1945年）3月の小学校の卒業式の時に、米軍が「ボンボンボンボンボン」と艦砲射撃しよったんや。もう卒業式どころじゃないですわ。避難命令が出ました。その頃、お父さんは現地召集で兵隊に取られてたんです。それで、母親と6人の子どもらだけで、食物やら着替えやらの荷物を水牛にくくりつけて（日本軍の指示に従って）タモガンへ逃げたんです。

（その途中）憲兵隊や軍医らが負傷兵を担架で運んで来て、生きてるのにな、あかんやつ（重傷者）を「ボン」と谷底へ、皆ほってしまひよる（投げ落とす）のを見たんや。鉄兜か何か。当たってな「カーン、カラカラーン」いう音がしよるのを聞いた。大勢の人が谷へ落とされて死んでると思うわ。

密林の中へ入って何か月も歩いとった3月頃に、（召集されていた）お父さんが栄養失調で骨と皮のようになって帰って来た。（戦禍から逃げてる）わしらを探すのに相当苦労したらしいわ。（部隊の）班長が九州の人やったらしいけど「この戦争、勝つ見込みない。大城、お前、目つぶったるからもう子どものとこへ帰れ」て、逃がしてくれたんです。でも、4月には5歳と3歳の妹2人が食べる物がなくて亡くなりました。

終戦になって、（日系住民）収容所へ行くまでに現地人に捕まってもうたんや。戦争終わったけど、日本兵は信用しよらんと戦ってた。だから、現地人も戦うわな。そんで、私らが密林から出くるタイミングが悪かったんや。歩いてたら、弟を殺された村人が「ジャパニーズ！うちの弟殺したのおまえやろう」て、怒ってきたんや。「そんなことはせん」て、弁解しても、村の人間もたかってきて、三日月型の短剣を突き付けられた。その時、村の幹部になってた人

が来たんや。知り合いで、「この大城は（良い人だから）殺したらあかん」といって、ジープで（ダリオンの日系住民）収容所まで送ってもらえた。

「もう子どものとこへ帰れ」て言ってくれた（部隊の）班長や知り合いの人に会わなかったら、うちの親父も死んでる。運が良かったと思うわ。よう殺されんと…。



コレヒドール島の米軍降伏とフィリピンの人々【コレドール陥落記念】

昭和17年（1942年）5月6日、コレヒドール島の米軍守備隊が降伏し、フィリピン全土が日本軍の支配下におかれました。写真は日の丸を振る当時のフィリピンの人々の姿です。

第2節 朝鮮半島北部・満洲からの引揚げ

1) 民間人の引揚げ

終戦時、300万人以上もの民間人が海外で暮らしていました。終戦によって、人々は海外から日本へ引揚げざることを余儀なくされました。

当初、日本政府は「居留民は出来る限り（現地）定着の方針を執る」とし、海外の残留日本人を帰国させない方針（『棄民政策』）を取ろうとしました。それは、当時の日本に大量の残留日本人を帰国させる余力がなかったためです。一方、米国は独立運動や内戦の火種が燻るアジア・太平洋の国々に残留する日本人が、事態に悪影響を及ぼすことを未然に防ぐため、民間人も含めて帰国させる方針を決めました。昭和20年（1945年）10月、日本政府も米国の指示に従い、民間人の引き揚げが開始されました。

終戦の混乱の中での引揚げは、多くの人にとってつらく厳しいものとなりました。特に、ソ連軍の占領地域（中国東北部や朝鮮半島北部）からの引揚げは、困難を極めました。この地域で終戦を迎えた多

くの人々は、ソ連軍によって移動の自由を奪われ、収容所での不自由な生活を強いられました。満足な食料もないなか、感染症だけでなく、ソ連軍兵士による暴行、殺害、強姦などに怯える生活を過ごしたのです。昭和21年(1946年)春のソ連軍撤退によって、多くの人々は帰国の途につくことができました。

一部の医療従事者や技術者などは、代わって中国東北部に進出してきた八路軍(中国共産党軍)と中国国民党軍による国共内戦の中、更なる残留を強いられました。

2) 朝鮮半島北部からの引揚げ

【体験談—終戦後の朝鮮半島北部での生活—】

大野 黎治良さん(甲賀市)

【終戦場所】朝鮮半島北部興南市(朝鮮民主主義人民共和国咸興市)

現地の朝鮮窒素肥料会社興南工場にお勤めされていた大野黎治良さん(当時17歳)は、朝鮮半島北部の興南市(現在の朝鮮民主主義人民共和国咸興市)で終戦を迎えました。

昭和20年(1945年)8月15日のちょうど12時頃です。突然、異常な「ブー、ブー」という音のサイレンが鳴り響いたんですよ。ちょうど、試験用フラスコを振りながら、分析をしていた時でした。そして、友達の中川が「日本は戦争に負けた。」と入って来ました。中川君は、お母さんが亡くなったって朝鮮で育つとるから、内地には親戚も誰もいなかったんです。だから「どないしてでも、内地へ帰れよ。(お前は)お父さんお母さん、待つとるからな。」とあって、涙流しとったのを覚えてます。

終戦後、ソ連が入るまでは案外、朝鮮の人たちともうまくいってたんや。でも、ソ連軍が入ってきて、警察官から軍隊から工場長まで、逮捕されましたから。そういう状態になってから、コロッと変わってしまった。我々が住んでた煉瓦建ての立派な寮からは追い出されて、朝鮮人の従業員の家に移らされた。工場が営業中止になって、給料貰えんから朝鮮の農家で働きましたんや。友達と4人で稲刈りに雇ってもらったけど、農家やなかったから稲刈りってやったことあらへん。大将に「お前だけ遅いやない

か」て、いわれながら刈ってましたわ。それで、昼になったら、オモニ(奥さん)が米の飯や明太子をいっぱい「食べなさい。」て、持って来てくれてね。ほで、食べて、藁の上に寝とって青空見とったら、もう戦争なんか忘れてしまうくらい。「ああ、こら平和やなあ」て、いう気がしよった。

(晩秋のころ)『興南のほうでは、引き揚げが始まる』という噂を聞いたから帰る」という友だちが来たんや。(雇用主の農家の)奥さんにその話したら、友達が来たこともちゃんと知ってはって、「ああ、そう。それやったら今おいしいお餅をたくさん作ってるから、それ持って帰り」て、米と、餅と、リュックサックにいっぱい持たしてくれはった。

ところが、冬の興南の街で足止めされました。街に満州からの避難民で溢れて、発疹チフスが流行ったんです。満州から引き揚げて来た人が行くところないから、何人も工場のコンクリートの上にゴザ敷いて寝とったんや。そら寒い。だから、凍死しますわ。日本人世話会からの使役で死体運搬に行ったんですけど、その時に発疹チフスにかかったんや。そら、ひどいですよ。熱が出て。でも、収容されたところは元遊郭で暖房なんてありません。1つの布団に2人が寝てましたんや。熱が42度まで上がって、それが10日以上も続くんです。それで私、熱こうなされて、「引き揚げ船が来る！」って、玄関を飛び出して。押さえられてね、また寢床に戻されたことが何回かあるんです。



大野黎治良さん 当時16歳(昭和19年1月撮影)



朝鮮窒素肥料会社応用化学科の社員たち



大野黎治良さんの両親と兄弟たち（昭和17年夏撮影）



大野黎治良さん関係地図

（原図は『満鮮及び北支大地図』九段書房発行より）

【体験談—おばあさんを背負って越えた38度線—】

大野 黎治良さん（甲賀市）

【終戦場所】朝鮮半島北部興南市（朝鮮民主主義人民共和国咸興市）

昭和21年（1946年）春、回復した大野黎治良さんは南へ向かう列車に隠れて乗り込みましたが、途中で列車が止まり、乗客全員が歩いて南へ向かうことを余儀なくされました。

（乗客の中に）歩けないおばあさんを連れた奥さんと娘がいたんや。それで、おばあさんをずっと背負って、38度線（朝鮮半島での米軍とソ連軍の分割占領ライン）を越えてきた。でも途中、大変やったんや。山道の峠で休憩してたら、40過ぎぐらいの男が金剛杖を振り回して、「お前ら日本人は、わしら朝鮮人をいじめてきた。今、仕返しをしてやる！」と、いって殴りかかってきよったんや。（副班長が相手してくれている間に）皆走り出した。でも、みんな逃げるの速いな。私は、ばあさん背負ったままやで一番最後や。副班長も追い越して先行ってしまいよんねん。で、金剛杖を持った男も、びっこ引きながら追いかけてきよる。「うわあ、こらあかん！」死に物狂いになって走って、気づいたら誰もいてへん。てなこともあったわ。

それで、38度線近くに着いたら、（朝鮮軍の）保安隊の幹部らしい人がきて、「皆さん、ソ連軍にわからないように安全に国境を突破させてあげます。で、朝鮮独立のために、寄付をして下さい。」と、言いよんねん。そやけど、（寄付して38度線を越えている途中に）「パンパン」と実砲でっせ、耳元を「ピュー、ピュー」と飛んできた。そして、前と横からソ連兵や。身体検査で時計や布やありとあらゆる物を取ってしまいよった。「金歯まで取るんちゃうか」、て感じやった。私はばあさん背負ったままや。「にっこり」しようして、「ホロショー。（元気でな!）」ていったら、ソ連の兵隊も同じ気持ちやったんやろな。「ニーホロショー。」て、私のお尻をちょっと叩いて行きよった。「元気で帰れ」の意味やろな。それから歩いて国境を越えたんや。

汶山（現在の韓国京畿道坡州市）に日本人世話会や赤十字の人がいたんです。私はそこに着いて、（疲れが出て）意識不明で寝とった。で、起きたら、お

ばあさんの家族は「いろいろありがとう。私たちは先に車でいきます。」て(伝言を残して)出発してたんや。

昭和21年(1946年)6月14日、大野黎治良さんは無事、日本へ帰り着くことができました。

帰ったら夜中の3時やった。家は(朝鮮へ旅立つ)前とっしよで、白いカーテンがしてあったわ。で、お袋が気づいて出てきたんやけど、途端に倒れてしもた。腰抜かしてな。「幽霊が帰って来たかと思っ

びっくりした。」て、お袋いったわ。そらそうやろ。眼だけ光って、痩せてな。幽霊みたいやん!

兄貴も中国の戦地から帰って来とって、(玄関の戸を)開けてくれて、姉たちが風呂沸かしてくれた。やっとお風呂に入れたんや。お袋が「黎治良、おまえはおばあさんを助けたんやから、おばあさんの分だけ長生きするよ」て、いってくれたんを今でも思い出すわ。

3) 満洲(中国東北部)からの引揚げ



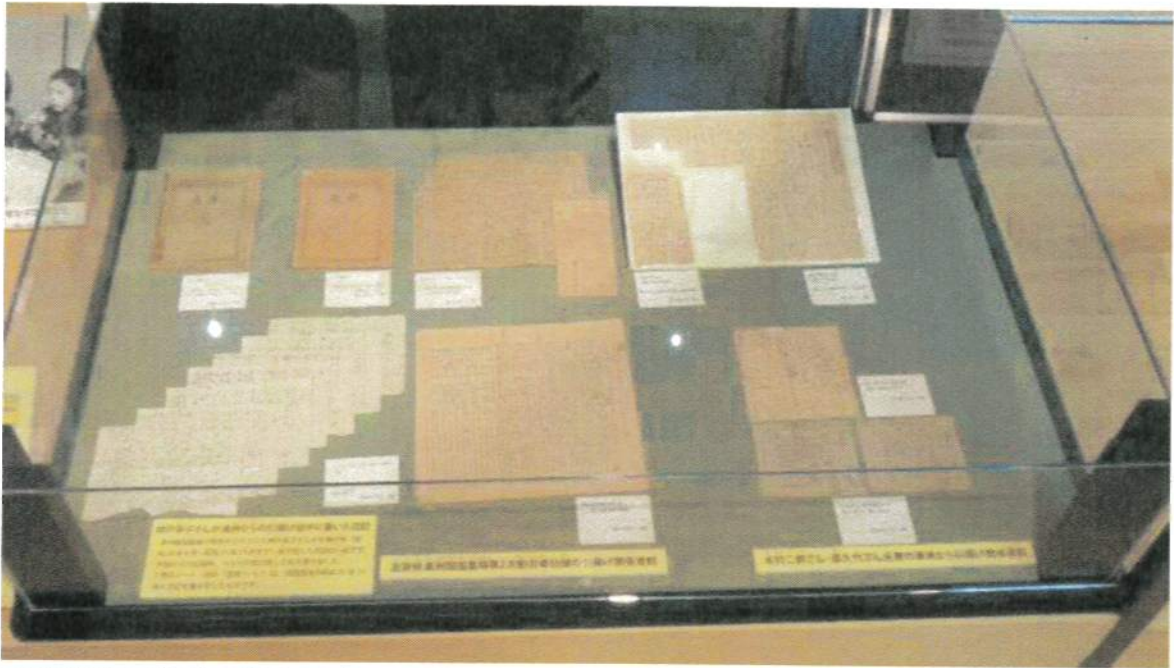
滋賀県満洲報国農場勤労奉仕隊の引揚げ

滋賀県満洲報国農場は戦争中、県などが『満洲国』琿春(現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州)に開設した農場です。県内の若者が交代で勤労奉仕隊員として派遣され、農作物を栽培していました。

昭和20年(1945年)8月9日、ソ連軍は満洲(中国東北部)へ進攻を開始します。ソ連軍の8ヶ月間におよぶ占領の後、中国東北部も八路軍(中国共産

(原因は『満鮮及び北支大地図』九段書房発行より)党軍)と国民党軍の内戦(中共内戦)の舞台となります。

満洲報国農場第2次勤労奉仕隊員と引率の神戸幸子先生たちは、生命や身体を危険に晒されながら、無法地帯と化した戦後の中国東北部に取り残されました。昭和21年(1946年)10月15日、1年2ヶ月におよぶ苦難の末に、ほとんどの隊員が滋賀県へ引揚げることができました。



滋賀県満洲報国農場第2次勤労奉仕隊の引揚げ関係資料

神戸幸子先生が満洲からの引揚げ途中に書いた日記

満洲報国農場の教師をされていた神戸幸子さんが引揚げ中（昭和20年8月～昭和21年10月まで）、書き記した日記の一部です。中国からの出国時、ベルトの芯に隠して持ち帰りました。

2冊のノート（日記『追憶Ⅰ・Ⅱ』）は、帰国直後の昭和21年11月に日記を書き写したものです。

満洲報国農場隊員名簿（第2次勤労奉仕隊員）

神戸幸子さんから母への手紙

ソ連の満洲侵攻直前に送ったもの（昭和20年8月25日に着信）

神戸さんの家族が切り抜いた新聞記事

木村二郎さん・喜久代さん夫妻の満洲からの引揚げ関係資料

木村二郎さんの引揚証明書（昭和21年6月25日付け）、木村夫妻の引揚者調査カード（木村二郎さん・喜久代さん）



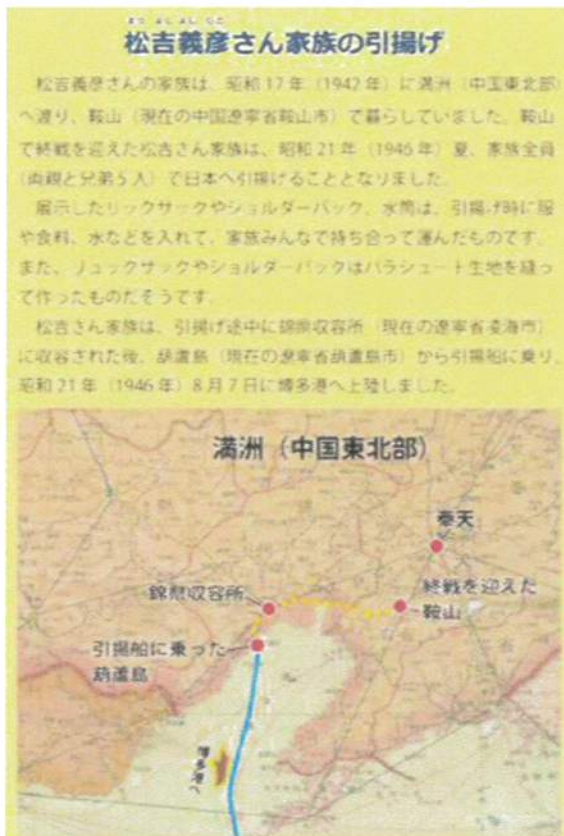
神戸幸子先生と第2次奉仕隊女子隊員たち



左：母親（松吉一枝さん）のリュックサック

右：引揚げに使った水筒

松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの



松吉義彦さん家族の引揚げ

(原図は『満洲及び北支大地図』九段書房発行より)



父・松吉彦之丞さんと妹・美枝さんが引揚げの際に持っていたリュックサックと弟・勇樹さんのショルダーバック
旗『第十三遣送団第二十五大隊第六中隊第三小隊』・『報国農場勤労奉仕隊』

満洲報国農場勤労奉仕隊員たちが途中で足止めされた中国吉林から引揚げの際に掲げた旗です。

第3節 八路軍に留め置かれて

中国による日本人の留め置き【留用】

終戦によって、中国は日本軍が占領していた各地の鉄道や通信施設、工場などの社会インフラを取り戻しました。長期にわたる戦争の結果、そうした施設の多くが中国人だけで稼働させることが困難となっていました。中国政府は、昭和22年(1947年)まで限って施設の運用に必要な日本人技術者を徴用して使うこと(留用)を決めました。

一方、終戦直後からソ連軍が占領していた中国東北部では、昭和21年(1946年)4月以降、ソ連軍と入れ替わって八路軍(中国共産党軍)が進出してきました。八路軍は多くの医療関係者や技術者を留め置き、軍や工場、鉱山などで働かせました。そうした人々は、中国共産党と中国国民党による内戦(国共内戦)が激化するなか、長期に渡り帰国を許されず、中国で働くことを強いられました。

昭和24年(1949年)の中華人民共和国の建国や昭和25年(1950年)の中国国民党軍の台湾への移動により、中国の内戦は終息しました。中国に留め置かれていた人々の引揚げは、赤十字社や中国紅十字社の協力もあり、昭和28年(1953年)3月に実現しました。昭和33年(1958年)7月まで約5年間で、約34,000人もの方々が興安丸などに乗って帰国を果たされました。



満洲(中国東北部)北部の冬季

【体験談—戦後の満洲に留まることを余儀なくされて—】 河内 研吾さん（大津市）

【終戦場所】 満洲南部（中国吉林省付近）

【収容所】 石人炭坑・通化監獄

（中国吉林省白山市・通化市）

河内 晴子さん（大津市）

【終戦場所】 中国大連市（中国遼寧省大連市）

【収容所】 石人の学校など（中国吉林省白山市）

満洲の飛行場で終戦を迎えた河内研吾さんは、ソ連の捕虜となることを拒み、仲間の兵士たちと逃走しました。一方、河内晴子さんは満洲の新京で医者をしていた父親のもとへ帰りました。

研吾さん 終戦間もなく、隊の主力はソ連へ捕虜となって連れて行かれました。私は諦めきれずに50～60人の仲間と一緒にソ連と一戦交えようと、弾薬を持って、白頭山に登りました。しかし、一晩泊まって、とてもこんなところでは暮らせないと、すぐに下山しました。そして間もなく、中国の保安隊（警察）に捕まって、石人（現在の中国吉林省）の炭坑で働くことになりました。

晴子さん 私は大連の専門学校に通っていたときに終戦になりました。それまで、わりと良い暮らしをしてたんで、中国人をみくびってました。そしたら、9月18日に暴動が起きて…。それはもう、ほんとうに酷かったの。新京（現在の中国吉林省長春市）の父の家へも人々が押し寄せて、小さな子どもまでが家に勝手に入ってきて、物を盗っていくの。私達姉妹はお便所に隠れたんです。戸を少し開けて覗いたら、もう、家の中はグチャグチャでした。そして、「日本人は全部石人の独身寮と小学校に集まれ」ということになったんです。

千人ぐらいの日本人がそこで暮らすことになったんです。私たち家族も、知らない家族と一緒に4畳半の独身寮に11人で住むことになりました。食事の材料は八路軍（中国共産党軍）がくれるんですが、毎日のように子どもたちが栄養失調で死んでいきました。もちろん大人もいっぱい死にました。そこから逃げようとして銃殺された人もいます。銃殺された人は埋葬させてくれないので、そのまま放っておいて豚のエサになりました。

研吾さん 鉄条網が張り巡らされた収容所で、沢山の日本人難民が集められて共同生活をしていました。ほとんどの男は炭坑で石炭を掘らされていました。

昭和21年（1946年）2月23日、関東軍の参謀が『通化事件』という暴動のようなものを起こしたんです。私は計画を事前に聞いていたけど、「とても成功するはずがない」と思って参加してなかったのに…。容疑がかけられて引っ張られたんです。拷問されている人の叫び声が聞こえてくるんです。そらあ、酷いもんでしたよ。取調室でね「白状しろ」といって、ポンポン叩かれたり、天井から吊るされたりねえ。一週間ぐらい取り調べられて、私を含めて8人が最終的に「重罪人だ」と言われて、通化の監獄に入れられたんです。監獄でも拷問はありました。食事は朝と晩だけで、みんな栄養失調になって、釈放されたのは5ヶ月後でした。炭坑に帰らされたんですが、発熱してね、家内（晴子さん）の親父の病院に入院したんです。



満洲（中国東北部）の街並み
（現在の黒竜江省牡丹江市旧市街）



農作業をする住民（絵まがき 牡丹江市周辺の田園風景）



河内夫妻の戦後たどった道（原図は『朝鮮及び北支大地図』九段書房発行より）

【体験談—女性に襲いかかった恐怖—】

河内 晴子さん（大津市）

戦前に満洲とよばれた中国東北部では戦後、ソ連軍の占領や中共内戦の混乱のなか、河内晴子さんのように多くの女性たちが身体や命の危険に晒されました。

強姦されそうになったことが3度もあります。一度目は暴動のすぐ後。顔見知りの警察官に襲われそうになりました。でも、私足が速かったので、走って馬小屋に逃げ込んで助かりました。2度目は石人の炭坑に居たとき、八路军（中国共産党軍）がお酌をしに来てくれというのよ。それで、もうなにをされるかわからないので、重い結核患者さんの病室に逃げ込んで助かりました。3度目は雪の中で中国兵に襲われそうになったとき。幸いにも、日本の准尉さんがそれを見ていて、窓から飛び出して、気づかれないように匍匐前進でその中国兵の上官を呼んで来てくれたんです。八路军ではそういうことは禁止されているので、上官はその兵隊を叱りつけてくれました。

そりゃ、襲われた女の人はたくさんいますよ。殺

された人もいますよ。ソ連兵がやって来るという情報が入ってきたら、皆、石炭の煤を顔に塗るの。酷い人は髪の毛を全部剃って、丸坊主にしたりして、男に化けちゃうのよ。それをしなかった小学校の先生が、ソ連兵に連れて行かれて襲われて殺されました。

【体験談—引揚げが始まる中で留め置かれて—】

河内 研吾さん（大津市）

【終戦場所】満洲南部（中国吉林省付近）

【留用】石人炭坑・西安炭坑

（中国吉林省白山市・遼源市）

河内 晴子さん（大津市）

【終戦場所】中国大連市（中国遼寧省大連市）

昭和21年（1946年）8月、中国東北部でも待ちに待った日本への引揚げが始まりました。

晴子さん 千人ほどいた日本人がドンドン帰国して、40～50人ほどになったけど、医者ということで強制留任させられた父のために残ることを決めたの。働き始めた炭坑の事務所で元気になった主人と再会したんです。主人も同じ事務所で経理をしてました。

顔見知りになって…

研吾さん 若い者同士やからねえ。昭和22年(1947年)3月3日に結婚したんです。

その頃、八路軍と国民党の内戦で、八路軍が勢力を広げて行って、次々満州を占領していきました。遼源には西安炭坑という大きな炭坑があってね。「石人炭坑の技術者に西安炭坑へ来てくれ」といって八路軍が連れていったんです。そこから「逃げようか」と思ったこともありますね。国民党の(占領)地域にいた日本人はドンドン日本に帰っていましたから。私らのように八路軍の方にいた者は利用されて帰れなかった。しかし、逃げようものなら妻の父や姉、弟が迷惑すると思って最後まで残ったんです。

昭和24年(1949年)10月1日、中国が中華人民共和国になって、適才適所の仕事をさせてもらえるようになりました。私は大学で経済を学んでいたので、西安炭坑の発電所の会計事務の仕事に就きました。

晴子さん でもこの時点で、私の家族はバラバラになりました。父は安東、姉は漢口、私らは遼源。奉天の医大に通っていた弟は奉天から引揚者にまじってすでに日本に帰っていました。当時はまだ文通が出来る状態ではなかったので、これが最後になるかもしれないと思っていました。そのころ、遼源で長男と次男が生まれました。

研吾さん 昭和28年(1953年)になると、日本の技術者も帰ってよらしいということになったんです。遼源の西安炭坑にいる日本人は全部日本に帰りました。でも、私たち家族だけは今度も帰れませんでした。当時は朝鮮戦争のまっただ中で、家内の父親の病院がある国境の町の安東で中国とアメリカの空中戦を見たと言われたからでした。1年間、西安に留め置かれて、突然、「お前、帰っていい」と言われて、天津に集められました。そしたら、家内の親父も姉も妹も皆そこにおいて、一緒に昭和29年(1954年)12月1日に舞鶴に着きました。これは中国のせめてもの配慮だったに違いありません。

晴子さん 日本に帰れるとわかったとき、中国で皆新しい衣服を買いました。天津の港で家族に会ったときは、それまで何も聞かされてないだけに、とっても嬉しかったです。日本の土を踏んだとき、わあ

祖国だと思いました。そして、旗を持って迎えてくださる人たちをみて、とても感動しました。



舞鶴に到着した河内さん家族

(舞鶴港引揚橋付近 昭和29年12月撮影)



舞鶴駅から列車に乗る河内さん家族(昭和29年12月撮影)



パナー：八路軍(中国共産党軍)とともに

日本軍の従軍看護婦たちが行動を共にした中国共産党軍西
満军区衛生部(齊齊哈爾の旧陸軍病院にて 昭和22年
(1947年)5月12日撮影)

【体験談—八路軍（中国共産党軍）に従軍した看護婦たち—】

大岡 こまさん・清水 清子さん（ともに東近江市）

【終戦場所】満洲南部（中国遼寧省付近）

【留 用】八路軍（中国共産党軍）

大岡こまさんと清水清子さんは従軍看護婦として戦地に赴きました。満洲（現在の中国遼寧省付近）で終戦を迎えた彼女たちを戦後も、多くの苦難が待ち受けていました。

大岡さん 私たちは興城（現在の中国遼寧省葫蘆島市）の病院にいた昭和20年（1945年）8月6日にソ連が参戦してきましたんや。それで、玉音放送の翌日（8月16日）に、逃げなあかんということで、車に載らん山ほどの荷物を燃やして、トラックで出発したんです。行き先は朝鮮でした。

でも逃げていく最中に、雨が「ボタボタ」降って来ましたんや。道がぬかるんで、ぬかるんで、トラックは難儀しました。その上、駅に着いても汽車が動きよらんかった。そこで、（敵兵が）トラック目掛けてコーリャン畑の中から撃ってきたんです。その時はほんまに怖かった。

清水さん ホンケイゴウという所で、トラックが八路軍（中国共産党軍）に止められたんです。その時、部隊の隊長さんが銃で撃たれて死にはって、上の人から「わしらには、どうすることも出来ん。賭けやから、あんたらの思ったとおりにしてくれ」て、いわれたんです。

大岡さん 回りを拳銃を持った八路軍の兵士に取り囲まれたんですわ。見張られてたから、逃げることでできませんし、何処へ連れて行かれるのやら判らしまへんかったから、どないなるか不安でしたわ。

清水さん みんなで泣いていましたね。でも、あとの方には、歌なんか歌ってましたね。みんな若かったし、元気があったんです。

大岡さん それから、歩いて、歩いて大変でしたわ。遅れそうになると（八路軍の）兵士から「国民党につかまるぞ」って脅されましたけど、私ら「どのみち、捕虜や」と思ってましたわ。八路軍には医者がいまませんでしたから、私らが医者みたいなことしてましたんや。それで「あなたたちは捕虜じゃない」て、言われて大事にされましたわ。

大岡さん それから後、8年間ずっと八路軍と行動をともにしました。一番悲しかったのは、八日市から来ていた同じ班の岡田正子さんが、昭和22年（1947年）6月8日、結核で亡くなられたことですね。

清水さん 私たち滋賀班は昭和28年（1953年）8月に懐かしい祖国日本に帰って来れたんです

けど、その時に、妹さんが「岡田正子は、元気ですか」と訊ねられたんです。でも、亡くなったことを言いづらくて…。



大岡こまさん（従軍看護婦のころ）



大岡こまさんたち大津日本赤十字滋賀支部の従軍看護婦（昭和19年7月7日の召集時に撮影）



満洲の病院で使っていた自動車



中国残留者の送還を求める運動

「熱願必救」抑留同胞救出県民大会特集号

(昭和26年2月20日発行)

従軍看護婦の送還を求める請願書

(中共地区残留者送還懇請状について)

大岡こまさん・清水清子さんから従軍看護婦滋賀班の婦長であった西浦一彥さんの夫 西浦武夫さんが中国政府に対して西浦一彥さんら留め置かれている従軍看護婦たちの早期送還を願う懇請状の写しです。

第4節 戦争と中国残留孤児

戦後の引揚げでは、様々な悲しい出来事がありました。中国での残留孤児や残留婦人の問題もその一つです。

戦後の旧満洲（中国東北部）では、引揚げ途中に親の死亡や誘拐、親が中国の人に子どもを預けるなどの様々な理由で、多くの子どもたちが親と離れねばならぬになりました。そうした子どもたちが中国に残され、現地で育てられたのが、中国残留孤児です。また、戦争中～引揚げ時に中国の人と結婚し、現地に留まったのが中国残留婦人です。中国の内戦（国共内戦）や戦後の冷戦の中、こうした人たちが日本に帰国できなくなりました。

昭和47年（1972年）の日中国交正常化により、帰国できるようになり、戦後36年目の昭和56年（1981年）に厚生省による残留孤児の訪日調査が実現しました。日中共同の身元調査によって、現在までに685人の孤児の身元が確認されています。



高粱畑で収穫作業をする人びと 満洲にて（中国東北部）

【体験談—戦争で孤児となって—】

伊藤 信男さん（大阪市）

【終戦場所】満洲北部（中国黒竜江省佳木斯市付近）
満洲北部（現在の中国黒竜江省付近）の開拓団の村で家族といっしょに暮らしていた当時9歳の伊藤信男さんは、終戦間際に侵攻してきたソ連軍に襲われました。

コウリャンやトウモロコシの畑の中の広い道を（開拓団の）みんなと何台かの馬車で（ソ連軍から）逃げただけで、夕方になって、発砲があったんですよ。お母さんたちと「ダーッ」と畑の中へ隠れたんです。疲れて寝てしまったんですが、眼覚めたらもうお母さんがいないんですよ。私だけじゃない。子どもとお年寄りだけが残って、子どもがみんな泣き叫んで探してた。どこへ連れて行かれたのかわかりません。とにかく消えてました。

砲弾の火の玉が走って行くのも見えるし、夜空が真っ赤っかなんですよ。佳木斯の町が燃えとった。そして、松花江の支流の方へ向かって逃げる途中、年寄りが女の子みんなをヒモで首絞めて…。殺して、川に流したんです。「ロシア人に強姦されたら…」と思ってやったんやろうけど、その時は「なんで、こんな殺すんやろう」と思ってた。

最後に佳木斯の町の中へ逃げ込んだけど、もう逃げられなくなって、「みんな自決せんとあかん」とおじいさんやおばあさんが…。子どもたち全員、ポケットに石やなんやら詰められて、川へ放り込まれたということですね。

目が覚めたら、（川にある）火力発電所のごみ受け

みたいなところに引っかかった。子ども2人（伊藤信男さんと唐さん）が助かったけど、30～40人おった（子どもたちは）みんな亡くなっとはずです。大人もみんな…

結局、気付いたらベットの上でした。（私らは助けられた後）何人もの家を転々しました。そして、私は養い親の翁慶福さん夫妻に子どもとして育てられたんです。後から聞いた話では、「(貰われるまでの途中に) 人身売買の市場で2人が売られとった」らしいんですね。でも、いい人にもらわれて行って、育てられたという記憶しかないですね。

お父さん（翁慶福さん）は、天主教（キリスト教）の牧師さんでした。（翁さん夫妻には）大事にされすぎぐらい。ものすごくよくしていただいたね。

でもしばらくして、三反運動（中国共産党による宗教弾圧）で宗教は全部禁止って言う事になりました。（翁慶福さんは）三反運動で引っ張られてしもうた。それきり帰ってこないです。多分、銃殺だと思えます。それで私は、イスラム教徒の李樹堂さんに託されて、焼餅を作る仕事を手伝っていました。

【体験談—日本という国も知らない中国残留孤児—】

伊藤 信男さん（大阪市）

【終戦場所】 満洲北部（中国黒竜江省佳木斯市付近）

【残留場所】 中国黒竜江省佳木斯市

中国残留孤児となった伊藤信男さんは中国で働きながら暮らしていました。

（当時の中国では）日本人に対する差別感はずらありましたよ。「中国をいじめてきた日本人が大きい顔をするな」って、（遊び友だちの）子どもたちからも、いじめは日常茶飯事でしたね。「お前らは違うんだ」と、名指して「シャオリーベン（小日本：小さい日本人）」て、見下されたり、「シャオリーベンゴイジ（小日本鬼子：ゴミ以下の鬼畜野郎）」といった下品な言葉で、（中国人と）同じ扱いはしてもらえなかったですね。

伊藤信男さんと共に奇跡的に助かった唐さんの養父は、佳木斯の市役所で働いていました。伊藤さんはその紹介で藤井正夫さん（吉田正夫さん）と出会います。

藤井正夫さんは畜産技師として役所に勤めとった

んです。そして、「日本人の子どもがいるよ」と、唐さんの養父が紹介してくれたんです。藤井正夫さんは非常に温厚な、優しい人でした。とにかく、ニコニコ、ニコニコしてね。始めから中国人と違うという感じでした。（私の腕を）ちょっと見たんですよ。そしたら痲瘡（予防接種の痕跡）があるから、これは日本人の子やと。自分の名前も書けるということで間違いないと。それから、たびたび会いました。

（戦後しばらく）日本人は「日本へ帰りたい」と口に出せなかったんです。そんなことしたら「反動分子や」て、えらいことになったから。昭和26年（1951年）頃から、「赤十字が日本人の帰国を支援している」とか「中国が日本と意見交換をしている」といった記事が新聞にどんどん出だしたんです。

でも当時、「許可が下りたから、日本へ帰ろう」という気持ちは本当になかったですね。だって、（11歳の）子供だったから。帰る当てもないし、親がどうなっているかもわからんし。日本の記憶もなかったから日本という国があること自身もわからなかった。ただ、日本人であることだけは自分で分かっていたわね。中国人でないということはないね。

藤井正夫さんが勧めてくれたんです。「ひょっとしたら、あなたを待っている人がいるかもしれないじゃないか。とにかく、（滋賀県に住んでいる）私の父（藤井鉄乗さん）が引受人になるから、祖国へ帰きなさい」と。多分ね、藤井正夫さんと会わなかったら、日本人だという意識も全くなかったんじゃないかな？ でも、苦しんだやろな。日本人であるということは間違いないのやから…。

昭和27年（1952年）に帰国された伊藤信男さんは多くの方々の協力もあり、昭和46年（1971年）に本当の自分を知ることができました。

それまでは父母の名前なしの戸籍だったんですよ。厚生省の方が何日かぶっ通して調べてくれて、山形から満洲へ渡った伊藤信男がおるとわかりました。それが本当の私だったんです。今は叔父や叔母やら親戚がいっぱいいるんですよ。

【体験談—中国の市役所で働いていた日本人は？—】

吉田 正夫さん（東近江市）

【終戦場所】満洲牡丹江市周辺（中国黒竜江省牡丹江市付近）

【捕虜収容所】シベリア チタ（ロシア連邦チタ州チタ）

【留 用】八路軍（中国共産党軍）

伊藤信男さんの帰国は、吉田（旧姓藤井）正夫さんとの出会いで実現しました。でもなぜ戦後、日本人が中国の市役所で働いていたのでしょうか？

満洲国立ハルビン開拓指導員訓練所の獣医畜産科で学んでいたんですが、昭和20年（1945年）3月から満洲国内の大学生が一斉に学徒出陣することになって、20歳の私は兵役に取られたんです。

8月12日の午後（ソ連軍の）迫撃砲にやられて人事不省で、戦場に置き去りにされてしまったんですわ。それを開拓団の方が見つけてくれたんです。私は日本軍やなしに、開拓団の方に助けられたんです。不思議な縁だと思いますね。その後、在留邦人の収容所へ一緒に入れられたんですけど、ソ連人は案外寛大ですわ。開拓団とかの一般人には、軍服さえ着てなかったらあんまり迫害を加えないよって。ただ、私の場合は軍服着てましたからねえ。

吉田正夫さんはシベリアのチタ収容所へ送られて経歴を尋問されました。

これも運が良いか悪いかわからないのですが、（獣医畜産科で学んでいたことを）全部いったわけですよ。そしたらね、「お前やったら日本帰したる。」と、ソ連人が通訳を入れていうんですよ。チタ収容所には10日ほどしかいなかったと思いますね。それでまた、貨車に乗せられたんですわ。「変やなあ〜、負傷してるからかな」と思った。

昭和21年（1946年）の2月頃やったわ。貨車が駅に「どーん」と着いて、（扉が）「ぱーっ」と開いたら、待ち受けてたのが八路軍（中国共産軍）や。「お前はソ連からこちらの方へ移管された。」というんです。牡丹江駅で看護婦さん10名ほどと医者が降ろされましたね。私も獣医ということで、強制的に八路軍牡丹江軍区の後勤部に所属することになったんです。馬を管理する獣医の仕事をしてました。当時は中国内戦でしたからね。

中国人民解放軍（八路軍などが統合された軍隊）が各地を解放していった結果、吉田正夫さんは軍務を解除され、佳木斯市政府の衛生課に所属することとなりました。

私は衛生課の技術者として主に食肉の検疫の仕事をしてました。その頃まで、日本への連絡は全くしよがなかったんです。だから音信不通。県庁でも『生死不明』という烙印を押してたんですよ。父も母も「もう多分亡くなってるのとちゃうか」と、絶望しておったようです。

私はラジオを組み立てて、熱心に日本の放送を聞いてたんです。するとね、「引き揚げがいよいよ始まる」という話が聞こえたんです。それで赤十字社に手紙を出して、昭和28年（1953年）に第4興安丸で帰って来れたんです。

ソ連に行つてそのままやったら、昭和23年（1948年）頃に帰って来れたかもしれんけど、また逆戻りしてますからね。そこが長かったということや。

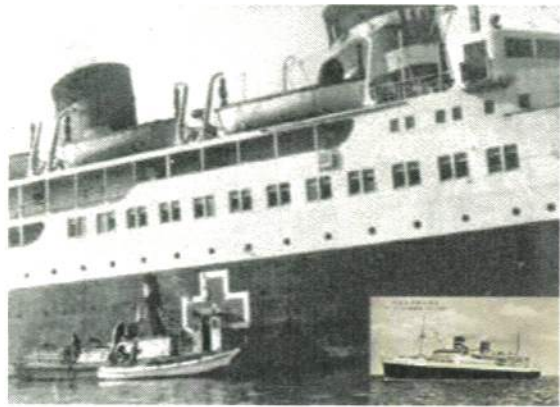


総はがき 牡丹江市市街の露店（現在の黒竜江省牡丹江市）
孤児となった伊藤信男さん（当時11歳ころ）はこうした街中で焼餅を作り売りしながら暮らしていました。

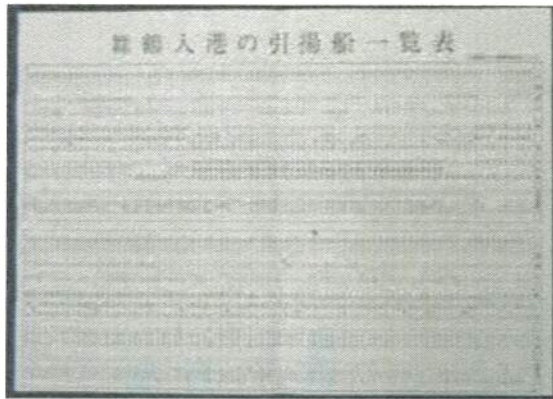


シベリア鉄道の貨車で運ばれる日本軍兵士
（シベリア出兵時（1920年頃）の撮影写真）

終章 帰郷 ふるさとで待つ人々のもとへ
第1節 帰国 一家族との再会—



パナー：日本への引揚船
戦後の引揚げに使用された興安丸



舞鶴入港の引揚船一覧表（舞鶴地方引揚援護局史による）
八路軍の従軍看護婦として、8年間も中国に留め置かれた西浦一糸さんが寄贈された『舞鶴入港の引揚船一覧表』です。赤く塗られている昭和28年8月11日に西浦一糸さんは帰国されました。

【体験談—『復員』やなく、『福入り』や—】

外池 泰造さん（日野町）

中国で捕虜となった外池泰造さんが日野の自宅で家族と再会された時の様子です。

長男も戦争に行きましたけども病気で亡くなって、姉も空襲でやられて死んでるんや。次男のわしも出征したから、母は「(わしも) もう死ぬ」と思ってたんやな。気持ちの上で病んでのはって、わしが帰るまでね、寝たり起きたりしてたらしい。ほんで、後で母親に聞いたんやけど、「お前が行ってる間、無事に帰ってくるよう、神社参りに日参した」と言うてましたわ。

昭和21年（1946年）5月に上海から、アメリカのリバティ船ちゅう貨物船に乗って帰ってきたんや。ほんで米原に着いて、「びっくりしよるから、電報打とう」て、（一緒に復員した）5～6人の滋賀県の連中と電報打ってから帰ったんや。

新聞に生存者名簿というのがあって、わしの名前が載ってたから、母親も（生存は）知ってたみたいやけどね、やっぱし元気よく帰ってくるかどうか、心配で何時も寝てたらしいわ。けど、私の電報を見て、直ぐに床上げして（元気になって）起きてしまはったらしいわ。

ほんで、私が帰ってきたときは、うちが活気づきましたね。父も祖母も喜びましたわ。私が帰ってきたのは、『復員』やなく、『福入り』や、ちゅうてね。



友人とともに（外池泰造さんは写真左側）



外池泰造さんのご家族



復員された外池泰造さんが戦地や捕虜収容所で使っていたモノ（水筒・飯盒・ゲートル）

【体験談—出征を見送ってくれた妹は…—】

平塚 廣さん（長浜市）

昭和21年（1946年）6月4日、中国の鹿角の捕虜収容所（中国湖南省岳陽市）に収容されていた平塚廣さんは解放され、上海から帰国の途につきました。

6月30日に引揚船が鹿児島港についたんです。あっちで止まり、こっちで止まりしてたから（各地で復員兵を乗せてきたため）、だいぶ時間がかかりましたわ。まず、最初にタグボートで白い毛布で巻いた遺体を船から降ろしたんです。輸送途中で死んでしまったんでしょうな。

（部隊は）鹿児島で解散したんです。敦賀から（いっしょに戦場へ赴いた）54名の部隊でしたけど、ようけ（多く）戦死しました。内地へ復員できたのは8名ほどです。

汽車に乗ってすぐに家に帰ったんですが、私は「死んだもんや」と、思われとって、（家族の）みんながびっくりしましたわ。（平塚廣さんが所属していた）福知山連隊は相当な犠牲者が出ましたし、（私のことも）「腹をやられて（負傷して）死んだ」と、風の便りで聞いていたようなんです。

私は、昭和17年（1942年）1月10日に出征したんですけど、2番目の妹の八重子が、弟を背負って宮さんまで送ってくれました。そやけど、帰って来たら妹がおらんかったんや。「妹はどうした」と、親

に聞いたら、「死んだ」といいますんや。妹は昭和20年（1945年）に長浜の軍需工場へ徴用されて、8月6日に腸チフスで死んでますんや。私もあとから親父に聞いたんですけど、その時の軍需工場の処遇があまりにも冷淡で、医者への対応もむちゃくちゃで、人間的な扱いやなかったらしいんです。看病らしい看病、薬らしい薬も出しとらへんかったそうや。妹はほんまに苦しかったやろと思います。親父は「いくら軍需工場やといっても、命の尊厳を知らん扱いや。親として耐えられん」といって、残念がってました。

第2節 帰らぬ人を持って

【体験談—新聞には名前が載っていたのに…—】

清水 花さん（高島市）

中国の戦場に送られた夫の清水嘉重さんの帰りを待つ清水花さんは、昭和20年（1945年）11月、新聞で夫の名前を見つけました。

たまたま新聞を見てたら、『中国の生存者』の名簿が載ってて、その中に主人の名前があったんです。もう、嬉しいで、「達者でいやはるんやったら、いつか帰ってきやはるわ」と、楽しみに待ってたんやけど…。

昭和21年（1946年）頃から、ポツポツ中国から復員してきやはりましたんや。ある時、向こうの方から帰って来やはる人がいて、ビュッとうちの家の角を曲がるのを見ると「うちの人や！」と思って、田んぼから走って帰ったこともありましたわ。田んぼにいても、ちっとも落ち着かへんかった。

そのうち、近所の人で、主人と同じところ（部隊）に行ってはった人が帰ってきやはったんです。せやけど、その人は「自分だけ無事に帰ってきて、うちの（主人）が死んだ」と言いにくかったんやろなあ。私には「次の船で帰ってくる」といわはったんです。けど、よそ（他の人）には「栄養失調で亡なりはった」と、いってはったんで、私の耳にも入りました。

その後ず〜とたって、慰霊祭の時に主人の戦友が教えてくれはりました。「お尻に出来物ができて、それがちっとも治らんで、病院に入らはったけど、薬もなく病人を寝かしたるだけやった」そうです。（病

院では「ただ寝て、死ぬのを待ってるだけやった」
そうです。

【体験談—「弟もいずれ帰って来るやろう」と聞いていたんです…—】 谷口 とみえさん（長浜市）
谷口とみえさんは夫の谷口清吉さんの消息を戦後に復員してきた義兄から聞いていました。

たまたま、夫のお義兄さんも（南洋の）ウエーク島にいたんです。それで、お義兄さんが復員してきて、「弟もそのうち帰ってくるやろう」と言ってくれたんです。

そやから、戦死公報が届いた時はほんまにびっくりしました。たまたま、親元へ帰っていたんですけど、嫁ぎ先から「清吉の戦死公報が届いた」て、知らせがありましたんや。急いで嫁ぎ先へ帰って、戦死公報を見るなり、目の前が真っ暗になりましたわ。『昭和20年7月11日戦死』となっていました。それで「これからどうするんや」と思いましたわ。それから、毎日、泣いて、泣いて…

後日、お義兄さんから聞いた話では「夫と出会ったのは病院で、その時はほとんど仮死状態だった」そうです。「夫はネズミ・トカゲそして人肉まで食べ、それでも餓死寸前で病院に寝かされていた」ということでした。お義兄さんは「弟は駄目やと言えんかった」といってはりました。



谷口清吉さんの出征時に写した家族写真



左：谷口清吉さん（写真右側の人物）

右：谷口清吉さん愛用の羽織

谷口清吉さんが生前、村の寄り合いなどによく着て行った愛用の羽織です。妻のとみえさんは復員する夫のため、大切にしまっておきました。

【体験談—帰らぬ夫を待って—】

田中 もとさん（大津市）

昭和22年（1947年）7月5日、田中もとさんは「昭和19年9月21日、比島バブヤン海峡方面の戦闘において戦死」と書かれた夫の田中為三郎さんの戦死公報を受け取りました。

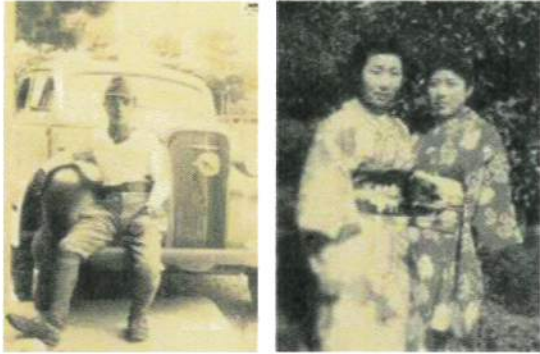
フィリピンへ輸送中の船が沈没して戦死という夫の戦死公報が来ましたんや。ハガキがフィリピンから来てるので「違うはずや」と思って、生きて帰って来やはった人に主人の生死を尋ねに行っただんです。そのお方の話でフィリピンに上陸したことが分かったんや。7月9日に県の世話部（戦死公報などの事務を担当する部署）へ行って訂正を依頼したところ、しばらくして「昭和20年3月21日、ルソン島アテンポロ方面の戦闘において戦死」と書かれた2通目の戦死公報が届きましたけど、「主人がいつ帰って来やはるのや」と待ってましたね。引揚船が新聞に載るたびに、もう帰って来やはるかな。次の船かな、次の船かなと思ってね。

昭和24年（1949年）10月7日に遺骨が帰ってくるという知らせが支所からあって、お寺へ安置された遺骨箱を父と娘の満里子が迎えに行きましたんや。

「お帰りなさい。ご苦労様でした。」とお祈りのあと、恐る恐る蓋を開けたら、中からコロリと木片が出て

きた。もう、言葉は出なかったな。

主人は南京へ行かほつたらしいです。少尉さんと一緒に食糧探しに歩いてはつたということも、友達に聞いたんですけど。やっぱり勝手に行動することができないんで、要領よう山奥へ逃げるのができなんだんやと思います。とにかくまじめな人でしたさかいな。



左：田中為三郎さん

右：夫 為三郎さんの復員を待つ田中もとさん

(写真左側の人物 昭和22年5月撮影)

『戦争が終わって』も…

海外で終戦を迎え、苦難の末に帰国された人の多くは、日本へ上陸された時や、故郷の家族・親しい人との再会を果たした時、初めて戦争が終わったことを実感されたそうです。

では、戦争の犠牲となった帰らぬ家族を待ち続ける人々にとって、戦争はいつ終わったのでしょうか。

『戦争がおわって』も終わらない 悲しみを多くの人に与え続けるもの、それが戦争です。



戦死された田中為三郎さんの遺品

田中為三郎さんからのハガキ・煙草ケース・鏡入れ・軍帽・ゲートル・拳公袋・雑囊

戦後の新聞に載った復員予測の記事 新聞の切り抜き「在外部隊の復員予想」 部隊の復員予定を載せた記事

第28回企画展示「戦争が終わってー海外からの復員と引揚げー」展示資料一覧表

展示資料番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
プロローグ				
1	能登川捕虜収容所に投下された箱	1	捕虜への救援物資が入っていました	奥村耕司さん
2	毛布	1	投下された箱に入っていた毛布	奥村耕司さん
第1章 終戦 捕虜収容所へ				
第2節 各地の捕虜収容所				
2) 中国ではー慈愛と徳ー				
3	名札	1	捕虜収容所で身につけていた名札	平塚廣さん
4	平塚廣氏の許可携帯物品一覧表	1	中国の担当官が出国時に作成(中華民国35年(1946年)5月5日)	平塚廣さん
5	北村昌博さんの許可携帯物品一覧表	1	中国の担当官が出国時に作成(中華民国35年(1946年)4月17日)	北村昌博さん
6	私物品明細書	1	復員時に日本軍部隊が作成したもの	平塚廣さん
7	従軍証明書	1	帰国時(昭和21年6月30日)に部隊長が発行	平塚廣さん
8	引揚証明書	1	帰国時(昭和21年6月30日)に引揚援護局長が発行	平塚廣さん
9	受傷証明書	1	帰国時(昭和21年7月1日)に部隊長が発行	平塚廣さん
10	罹患証明書(マリア熱)	1	帰国時(昭和21年7月1日)に部隊長が発行	平塚廣さん
3) フィリピンでもー住民感情と戦犯ー				
11	日本軍の水筒	1	福嶋敬さんがシンガポールの捕虜収容所で使用	福嶋敬さん
12	レーションの缶詰を使った弁当箱	1	福嶋敬さんがシンガポールの捕虜収容所で使用。捕虜収容所で支給された缶詰の空缶を利用	福嶋敬さん
13	工員細部心得	1	大阪陸軍航空廠八日市分廠	野村和男さん
14	折りたたみ式フライパン、食器(捕虜収容所で使用したもの)	1	直木清さんが米軍から支給されたもの	直木清明さん
15	捕虜収容所で使用したスプーン	1	直木清さんが米軍から支給されたもの	直木清明さん
16	捕虜収容所で使用した水筒	1	直木清さんが米軍から支給されたもの	直木清明さん
4) ビルマの捕虜収容所ー使役と交流ー				
17	長袖シャツ	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で着ていた作業服	小林幸子さん
18	ズボン	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で着ていた作業服	小林幸子さん
19	コップ	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で使っていた食器	小林幸子さん
20	弁当箱	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で使っていた食器。戦争中に英国軍の投下物資(缶詰)で自作したもの	小林幸子さん
21	捕虜収容所で使った小鉢・皿	6	小林育三郎さんがアーロン収容所で使っていた食器	小林幸子さん
22	「安第一〇〇三〇部隊之印」	1	第53師団工兵第53聯隊の印	清水俊章さん
23	「工兵第五十三聯隊副官之印」	1	第53師団工兵第53聯隊の副官印	清水俊章さん
24	スケッチ「捕虜収容所」【アーロンキャンプ(収容所)】	1	傍島富士男さんが捕虜収容所で描いた絵です。	傍島公男さん
25	スケッチ「屈辱的な作業服装」	1	傍島富士男さんが捕虜収容所で描いた絵です。	傍島公男さん
26	スケッチ「グルカ兵の監視下での労役作業」	1	傍島富士男さんが捕虜収容所で描いた絵です。	傍島公男さん
27	証明書	1	「武器禁制品ヲ所持シアラザル事ヲ照明ス」(昭和22年6月)	傍島公男さん
28	復員証明書	1	昭和22年7月24日	傍島公男さん
29	事実証明書	1	昭和21年3月3日	傍島公男さん
30	労賃支払明細書	1	英国が発行した傍島富士男さんのビルマでの労役の労働賃金の明細書です。	傍島公男さん
31	着装及携行被服員数表(昭和21年4月30日)	1	帰国時に発行された持物リスト	熊谷直孝さん
32	送金送票焼却(償却)証明書	1	現地からの送金の受け取り証明書	熊谷直孝さん
33	旅行者外食券(自昭和21年3月1日 至8月31日)	1	復員者に渡された外食用の食券	熊谷直孝さん
34	英字通信誌『FAUJI AKHBAR』12th February 1946	1	ビルマの捕虜収容所で発行された1946年2月12日発行の英字新聞	熊谷直孝さん
35	報道部通信(昭和20年9月3日)	1	ビルマの捕虜収容所で発行された新聞	熊谷直孝さん
36	外出用腕章	1	捕虜収容所からの外出時に着用	熊谷直孝さん
37	捕虜収容所で知り合ったインド人下士官の連絡先	2		熊谷直孝さん
38	『RUBBING ALONG IN BURMESE』英語ビルマ語会話集	1	捕虜収容所で知り合ったインド人下士官にもらった「会話用例集」	熊谷直孝さん
7) ソ連での抑留者の生活				
39	外套(コート)	1	抑留中に着ていたもの	北島敬三さん
40	防寒帽、外套、防寒袴	3	シベリア抑留中に着ていた衣服	片山三次さん
41	防寒着	1	抑留中に着ていたもの	田中清さん
42	水筒	1	抑留中に使っていたもの	北島敬三さん
43	北島敬三さんから北島保三さんへの葉書(俘虜用郵便葉書)	1	捕虜収容所からの手紙	北島敬三さん
44	食器	1	抑留中に使っていた食器	片山三次さん
45	食器	1	抑留中に使っていた食器	片山三次さん
46	スプーン(収納袋つき)	1	抑留中に使っていたスプーン	片山三次さん
47	復員者の皆々様へ	1	脇栄太郎さん関係資料	脇安明さん
48	脇栄太郎さんの引揚証明書	1	脇栄太郎さん関係資料。昭和23年7月に復員	脇安明さん
49	復員の手引	1	脇栄太郎さん関係資料。復員時に渡されたもの	脇安明さん
50	タバコの巻紙に書かれた短歌や料理レシピ	89	脇栄太郎さんが抑留中に書き記したもの	脇安明さん

展示資料 番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
8) 捕虜収容所での余暇の楽しみ				
51	SONG BOOK	1	傍島富士男さんがアーロン捕虜収容所で書き記した歌詞集	傍島公男さん
52	パラシュートの布で作った基石袋	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で自作	小林幸子さん
53	捕虜収容所で自作した基石(白、黒)	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で自作	小林幸子さん
54	捕虜収容所で作った基石	1	小林育三郎さんがアーロン収容所で自作	小林幸子さん
55	イギリス製のタバコ(空箱)	1		本間京子さん
56	収容所で作った花札	1	中国の捕虜収容所で厚紙を使って自作	北村昌博さん
9) 捕虜収容所で作った手帳				
57	小林育三郎さんの日記(昭和20年8月~12月)	1	捕虜収容所で記した日記	本間京子さん
58	小林育三郎さんの日記(昭和21年1月~3月15日)	1	捕虜収容所で記した日記	本間京子さん
59	小林育三郎さんの日記(昭和22年1月~7月5日)	1	捕虜収容所で記した日記	本間京子さん
60	傍島富士男さんの手帳	1	アーロン収容所で自作した手帳	傍島公男さん
61	傍島富士男さんの手作り英単語帳	1	アーロン収容所で自作した英単語帳です	傍島公男さん
62	傍島富士男さんの歌集	1	アーロン収容所で書き記した歌集	傍島公男さん
63	直木清さんの手帳	1	捕虜収容所で手作りされた手帳です。表紙には米軍パラシュートの布が貼られています。	直木正樹さん
64	山中隆一さんの手帳	1	ソ連での抑留中に手に入れたセメント袋の紙で自作した手帳	山中隆一さん
65	田中清さんの手帳	1	抑留中にパン工場で手に入れた紙で作った手帳	田中清さん
第2章 引揚げ 遠い祖国へ				
第2節 朝鮮半島北部・満洲からの引揚げ				
3) 満洲(中国東北部)からの引揚げ				
66	旗『第十三遣送団第二十五大隊第六中隊第三小隊』	1		神戸幸子さん
67	旗『報國農場勤労奉仕隊』	1		神戸幸子さん
68	父親(松吉彦之丞さん)のリュックサック	1	松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの	松吉義彦さん
69	妹(松吉美枝さん)のリュックサック	1	松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの	松吉義彦さん
70	弟(松吉勇樹さん)のショルダーバッグ	1	松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの	松吉義彦さん
71	母親(松吉一枝さん)のリュックサック	1	松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの	松吉義彦さん
72	引揚げに使った水筒	1	松吉さん家族が満洲からの引揚げで使用したもの	松吉義彦さん
73	ベルトの芯にして持ち帰った日記の一部	1	引揚げ中に神戸幸子さんが記した日記の一部です。	神戸幸子さん
74	満洲報國農場隊員名簿(第2次勤労奉仕隊員)	1		神戸幸子さん
75	日記「追憶」I	1	満洲で記した日記(の一部)と記憶をもとに当時のことを書き記した手記	神戸幸子さん
76	日記「追憶」II	1	満洲で記した日記(の一部)と記憶をもとに当時のことを書き記した手記	神戸幸子さん
77	神戸幸子さんから母への手紙	1	ソ連の満洲侵攻直前に送ったもの(昭和20年8月25日に着信)	神戸幸子さん
78	新聞の切り抜き(昭和21年9月10日)	1	神戸さんの家族が切り抜いた新聞記事	神戸幸子さん
79	毎日新聞の切り抜き(昭和21年7月6日)	1	神戸さんの家族が切り抜いた新聞記事	神戸幸子さん
80	木村二郎さんの引揚げ証明書(昭和21年6月25日付け)	1		木村喜久代さん
81	木村夫妻の引揚げ調査カード(木村二郎さん・喜久代さん)	2		木村喜久代さん
第3節 八路軍に留め置かれて				
82	中共地区残留者送還懇請状について	1	妻(西浦一糸さん)の送還のために西浦武夫さんが書いた請願書の写し	西浦一糸さん
83	「熱願必救」抑留同胞救出県民大会特集号(昭和26年2月20日発行)	1		西浦一糸さん
第三章 帰郷 ふるさとで待つ人々のもとへ				
第1節 帰国一家族との再会				
84	舞鶴入港の引揚船一覧表(舞鶴地方引揚援護局史による)	1		西浦一糸さん
85	水筒	1	復員された外池泰造さんが戦地や捕虜収容所で使っていたモノ	外池泰造さん
86	飯盒	1	復員された外池泰造さんが戦地や捕虜収容所で使っていたモノ	外池泰造さん
87	ゲートル	1	復員された外池泰造さんが戦地や捕虜収容所で使っていたモノ	外池泰造さん
第2節 帰らぬ人待って				
88	谷口清吉さん愛用の羽織	1		谷口とみえさん
89	田中為三郎さんからのハガキ	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
90	煙草ケース	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
91	鏡入れ	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
92	軍帽	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
93	ゲートル	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
94	奉公袋	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
95	雑囊	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
96	新聞の切り抜き「在外部隊の復員予想」	1	部隊の復員予定を載せた記事	植田安正さん

第28回企画展示「戦争が終わってー海外からの復員と引揚げー」写真・図表パネル一覧表

章	節	項	写真・図表キャプション	提供者	備考	
メインタイトル		パネル	マニラ郊外の米軍13捕虜収容所にて	大塚源弥さん	昭和21年3月	
プロローグ	1) 玉音放送の流れる中で		田中さん夫妻の写真 田中為三郎さんが戦地へ赴く直前	田中もとさん	昭和19年(1944年)8月撮影	
			日記帳『君 発ちし後の記』	田中もとさん		
			戦後出版された手記	田中もとさん		
			『読売報知新聞』(昭和20年(1945年)8月15日号・16日号)	田中もとさん		
	2) 日本軍の捕虜収容所			フィリピンで降伏した連合国軍兵士?	堀池榮一さん	
				野田沼捕虜収容所の井戸	当館	
				野田沼干拓地の堤防に建つポンプ小屋	当館	
	3) 戦争が終わるまで			満洲(中国東北部)の柿売りのおじいさん	山元憲司さん	
				農作業をする満洲(中国東北部)の住民	山元憲司さん	絵はがき 牡丹江市周辺の農村風景
				戦場での記念写真	林静子さん	洪毛屋母塞での戦闘後に京都日日新聞記者撮影
				舟で漁をする中国の人たち(黄河にて)	林静子さん	
				攻撃を受けた街(中国東北部の戦場)	山元憲司さん	
				戦闘によって燃え落ちる鉄橋(中国東北部の戦場)	山元憲司さん	
				炎上する集落を進む日本軍	林静子さん	
				ソ連・『満洲国』国境付近の日本軍兵士たち(中国東北部)	山元憲司さん	
				中国の戦場を移動する日本軍の兵士たち(漢口作戦終了後)	林静子さん	
				物資輸送に駆り出された中国の住民たち	林静子さん	
				日本軍の物資輸送のための道路を補修する中国の人たち	林静子さん	
				日本軍とフィリピンの人々	堀池榮一さん	
				フィリピン 日本軍兵士と砲弾	堀池榮一さん	
				戦闘によって破壊されたフィリピンの街	堀池榮一さん	
				フィリピン 集落を通る日本軍	堀池榮一さん	
				フィリピン 機関砲を点検する日本軍兵士	堀池榮一さん	
				フィリピン 子どもを抱っこするお母さん	堀池榮一さん	
				牛車に乗るフィリピンの人々	堀池榮一さん	
				ビルマ 白兵戦で戦う日本軍の兵士たち	田村芳江さん	『大東亜戦争報道写真録』、昭和17年12月8日、読売新聞社発行
				日本軍の空爆を受けるビルマの首都ラングーン(昭和16年12月24日撮影)	田村芳江さん	『大東亜戦争報道写真録』、昭和17年12月8日、読売新聞社発行
			僧侶にお布施をするビルマの人たち	橋本武浩さん	『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行	
	第1節 終戦後の戦場では			特攻に使用された小型艇『震洋』	アメリカ海軍	1945年 米軍撮影
				マニラへ向かう直前の野村和男さん(当時14歳)	野村和男さん	昭和18年5月撮影
2) 中国では一慈愛と徳一				陸軍へ入隊した頃の平塚廣さん(初年兵)	平塚廣さん	
				捕虜収容所の野球を楽しむ日本軍の兵士たち	林静子さん	

章	節	項	写真・図表キャプション	提供者	備考	
第1章 終戦 捕虜収容所へ	第2節 各地の捕虜収容所		捕虜収容所での野球観戦(部隊副官とともに)	林静子さん		
		3) フィリピンでも一住民感情と戦犯一	フィリピン ルソン島の人々	堀池栄一さん		
			タクロバン収容所での野村和男さんたち	野村和男さん		
		パナー	フィリピンの捕虜収容所でのくらし フィリピン マリキナ捕虜収容所での炊事場風景	直木正樹さん	昭和21年(1946)8月頃撮影	
		4) ビルマの捕虜収容所一使役と交流一	熊谷直孝さん(入隊後)	熊谷直孝さん		
		5) ソ連による抑留【シベリア抑留】	山中隆一さん(当時23歳、左側の人物)	山中隆一さん	昭和19年大阪での防空勤務時に撮影	
			戦中に白兵戦を挑む日本軍兵士たち(ビルマの戦場にて)	田村芳江さん	『大東亜戦争報道写真録』、昭和17年12月8日、読売新聞社発行	
			ソ連の日本人捕虜収容地区に見る今回紹介した方々の抑留先	当館	『シベリア抑留』長勢了治(2015)より一部改変	
		6) シベリアの風景	シベリアの冬の木立(1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
			シベリアの街とみられる風景(1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
			ロシア人女性(1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
			馬ぞり(1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
			シベリア鉄道エフゲネフ駅(1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
			ウラジオストクの街並み(エゲリエド税関倉庫付近、1920年頃撮影)	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃)の写真	
		7) ソ連での抑留者の生活	【参考資料】山中隆一さんの防寒着	山中隆一さん		
			抑留後の田中清さんたち(田中さんは写真左側の人物 当時21歳)	田中清さん	シベリアから帰国された友人3名で帰国2ヶ月後の昭和23年1月に撮影	
			田中清さんが約1年間過ごされたコムソモリスク第2収容所跡	田中清さん	現在は刑務所となっている。平成17年8月撮影	
			田中清さんが強制労働に従事されたシベリア コムソモリスクの煉瓦工場	田中清さん	平成17年8月撮影	
			抑留中に亡くなられた方々の埋葬地	田中清さん	コムソモリスク北方のフルムリ、平成17年8月撮影	
			シベリア コムソモリスクの病院収容所跡	田中清さん	平成17年8月撮影	
		8) 捕虜収容所での余暇の楽しみ	【参考資料】内林義幸さんがシベリア抑留中に自作したマージャン牌	内林義幸さん	内林義幸さん所蔵資料	
		第1節 戦争と日系移民		サンドンの街へ強制移住させられた日系移民たち	小林寛さん	
				ロッキー山脈にあったサンドンの街	近藤義蔵さん	
				小林菊尾さんと息子の寛さん	小林寛さん	収容所にいる夫の久太郎さんへ送った写真
				小林久太郎さん・菊尾さん夫妻の渡航許可証や移民身分証明書(コピー)	小林寛さん	
				コレビドール島の米軍降伏とフィリピンの人々【コレドール陥落記念】	堀池栄一さん	
		第2節 朝鮮半島北部・満洲からの引揚げ	2) 朝鮮半島北部からの引揚げ	大野黎治良さん 当時16歳	大野黎治良さん	昭和19年1月撮影
朝鮮窒素肥料会社応用化学科の社員たち	大野黎治良さん			大野黎治良さんは後方2列目の右から2人目、昭和18年12月撮影		
大野黎治良さんの両親と兄弟たち	大野黎治良さん			昭和17年夏撮影		
大野黎治良さん関係地図	当館			『満鮮及び北支大地図』九段書房発行より一部改変		
3) 満洲(中国東北部)からの引揚げ	滋賀県満洲報国農場勤労奉仕隊の引揚げ		当館	『満鮮及び北支大地図』九段書房発行より一部改変		
	松吉義彦さん家族の引揚げ		当館	『満鮮及び北支大地図』九段書房発行より一部改変		
	神戸幸子先生と第2次奉仕隊女子隊員たち		神戸幸子さん			

章	節	項	写真・図表キャプション	提供者	備考	
第2章 引揚げ 遠い祖国へ	第3節 八路軍に 留め置かれて		満洲(中国東北部)北部の冬季	山元憲司さん		
			満洲(中国東北部)の街並み	山元憲司さん	現在の黒竜江省牡丹江市 旧市街	
			農作業をする住民	山元憲司さん	絵はがき 牡丹江市周辺の 田園風景	
			河内夫妻の戦後たどった道	当館	『満鮮及び北支大地図』九 段書房発行より一部改変	
			舞鶴に到着した河内さん家族	河内晴子さん・研 吾さん	舞鶴港引揚棧橋付近、昭和 29年12月撮影	
			舞鶴駅から列車に乗る河内さん家族	河内晴子さん・研 吾さん	昭和29年12月撮影	
			大岡こまさん(従軍看護婦のころ)	大岡こまさん		
			大岡こまさんたち大津日本赤十字滋賀支部の従軍 看護婦	大岡こまさん	昭和19年7月7日の召集時 に撮影	
			満洲の病院で使っていた自動車	西川孝一さん		
		バナー	八路軍(中国共産党軍)とともに	大岡こまさん	齊齊哈爾の旧陸軍病院に て 昭和22年(1947年)5月12 日撮影	
第4節 戦争と中 国残留孤児			高粱畑で収穫作業をする人びと 満洲にて(中国東 北部)	山元憲司さん		
			絵はがき 牡丹江市市街の露店	山元憲司さん	現在の黒竜江省牡丹江市	
			シベリア鉄道の貨車で運ばれる日本軍兵士	新美喜美子さん	シベリア出兵時(1920年頃) の撮影写真	
終章 帰郷 ふる さとで待つ人々の もとへ		バナー	日本への引揚船	河内晴子さん・研 吾さん	戦後の引揚げに使用された 興安丸	
	第1節 帰国 一族との再会		友人とともに(外池泰造さんは写真左側)	外池泰造さん		
			外池泰造さんのご家族	外池泰造さん		
	第2節 帰らぬ人 を待つ			谷口清吉さん(写真右側の人物)	谷口とみえさん	
				谷口清吉さんの出征時に写した家族写真	谷口とみえさん	
				田中為三郎さん	田中もとさん	
				夫 為三郎さんの復員を待つ田中もとさん	田中もとさん	写真左側の人物、昭和22年 5月撮影

